

# 暗夜之礫

すいませんorz

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

僕は武器商人と旅をした――。

「海運の巨人」と称される世界大手の武器運送会社、HCL社のエージェントへココ・ヘクマティアルを護衛するために世界中を旅することになった、少年兵ヨナ。

武器を憎む彼が今回おとずれた街。その街の名はロアナプラ――。

犯罪都市ロアナプラで巻き起こる「とある国家」をめぐる血なまぐさい陰謀の影。

少年兵ヨナが見た、世界の真実とは――？

※この作品は理想郷でも投稿していません。

# 目次

・第一話	不入虎穴、取得虎子	1
第二話	青天霹靂	27
第三話	重溫旧交	41
第四話	百戰百勝、非善之善者也。	56
第五話	不戰而屈人之兵、善之善者也。	69
第六話	暗中活動	84
第七話	不求同年同月同日生 但願同年同月同日死	99
第八話	群雄割拠	119
第九話	虚虚実実	133

第十話	暗夜之礫	前編	149
第十一話	暗夜之礫	後編	164
最終話	国破山河在		183



## ■ 第一話 不入虎穴、取得虎子

私が目を覚ますと、そこには戦争があった。

私は私が寝ていた間に『外』になっていた部屋から沢山の人民解放軍の兵隊と何台かの戦車が丘の上で砲身をきりきりとまわして、どこかに標準をつけているのが見えた。

私はベツトの下においてある靴を履こうとしたけれども、地面が揺れてうまくはけなかった。

外は炎と煙が立ち上り、幾百もの雷が落ちたみたいなの、まぶしい光と大きな音が絶え間なくなり続けていた。

私は地震のような揺れに私は身体を壁にぶつけながら、何とか靴を履き終えて、寝る前までであった、ドアがあったところから家の外に飛び出した。

私がいつも見慣れた村の風景は大きな子供がおもちや箱をひっくり返したかみたいにくぐちやぐちやになっていた。

米を育て稲穂が実り始めていた水田は炎でもやされ、一部の水田はその青々とした稲を黒く焦がし墨になっていた。

また、その周りの家々は吹き飛んで壁だけになっているのが半分。火事になって燃え続けているのがもう半分。さらにその周りではらばらになった家具や、真つ赤に染まった大小さまざまな死体が転がっていた。

私はその村の光景を見て自分が無事であったことに驚きつつ、自分の家もまたほとんど壁だけになっていることに気がついた。

私の家はきつとあの戦車が撃った砲弾に打ち抜かれて壁が吹き飛んだのだろう。泥とレンガで積み上げられた、中国の農村部ではどこにでもあるような、フートンは戦車の砲弾で簡単に砕け散ったに違いない。

私はその砲弾に自分が当たらなかった幸福を嘔み締め、私以外の家族が助からないことを願いながら、私はそのまま一直線に村のすぐそばの川に向かう。

まだ幼かった私は川に行けば、あつい炎が体を焼くこともないと思っただし、それに川辺に生えている背の高い雑草なら私の身体を覆い隠しくれると考えたからだっただ。

私はいつも嫌々ながら重い水桶をかついでいく、川までの道は無我夢中で走りぬけた。

雑草が足に絡み、小石につまずき、見慣れた近所の人の死体に驚きながらも、私はそのはやすさを緩めることなく、川まで続くでこぼこ道を走った。

もうすぐ川につく——というところで不意に私の背中がむずむずして立ち止まった。

背中中の神経を逆なでされるような、背中中の皮膚の上を虫が這うようなそんな気持ちの悪い感覚がした。

そんな風に私の背中がむずむずするときはいつも決まって嫌なことが私に起こった。

私の背中がむずむずするときには機嫌の悪いママが私に殴りかかる時や、酒によったパーパが私にイタズラしたり、わがままな兄が私にイジワルされたり、とにかく私にとって嫌なことが起こる。

だからいま、川に向かって走っている私の背中がむずむずするということは、きっと私に悪いことが起こる前触れなのだ。もしかしたら、このまま川へ向かう前に死んでしまふのかもしれない——。

それでも私は動けずにいた。それどころか立ち止まった私の背中は今までに無く激しくむずむずし、まるで背中いっぱい毛虫が張っているかのような気持ちの悪さに私

はその場に座り込んでしまった。

このままここでじっとしてはいけない、背中のみずみずは嫌なことの前触れだ。それが頭ではわかっていただけのだけでも、私はどんどんと強くなる背中のみずみずのせいでどうしてもそこから動けなかった。

私が川辺に座り込んでいると後ろから誰かが走ってくる足音がした。

私は考える。きっと他の誰かも自分の身を隠すために、私と同じように川へ向かっているのかもしれない。

なら私がこのまま川へ続く道でうずくまっていたらきっとそいつに会ってしまおう。でも、どんどんとひどくなる背中のみずみずのせいで私の体はどんどんと重くなっていった。

どんどんと近づいてくる大人の足音、誰かの荒々しい息遣い。

私に近づいてくるこの足音はもしかしたら、私の村をめちやくちやにした人民解放軍



の兵隊かもしれない。それとも、このぐちゃぐちゃな死体だらけの村で気がおかしくなってしまった大人かもしれない。

その時の私は私以外の他人への恐怖と、兵隊が殺しに来るかもしれない恐れと、どんどんと不快感を増していく背中のみずみずとで、ごちゃ混ぜになっただけで、ただそこに座りこむことしかできなくなっていた。

不意に私の意識が途切れる――。

私は深い眠りの中で自分が小さかったころの夢を見ている。何年も前のことなのにいつも夢に見るその光景を、今でも色あせることなく思い出すことが出来るのは、そこが人生の変わり目だったからかもしれない。

まだまだ目が覚めるには程遠いまどろみの中で、私の幼少時代の夢はいつたん途切れ、自身の内側へと精神が沈んでいく――。

小さかったころの私が抱いていた自分以外の他人への恐怖。それは奴隷のように虐げられた生活が原因だった。

中国が国策として推し進めた「一人つ子政策」は世界的に有名だが、その裏で行われている悪夢のような真実を知る人間は意外と少ない。

人間というものは意外と不器用なもので夫婦の営みをしていけば、たとえ気をつけていたとしても子供ができてしまう。それが一人ならば問題はないが、それが二人目以降だと状況は一変する。

子供が一人増えるたびに、そこには『税金』が余計にかかるからだ。

もちろん一部の裕福な人民なら増えた子供の分の税金を払うことは用意ではあるし、私の住んでいたような辺鄙な農村部でなければ中絶をするのも難しくはない。

しかし、貧乏で中絶する費用も病院もない農村部だとしたら、子供が一人増えるということは死活問題に直結する。食い扶持は減り、さらに金はかかる。

そのために誰かが考え付いた方法がたとえ子供が生まれたとしても、政府に知らせず戸籍に残さないという方法だった。

つまり、金のない貧乏な農村部で生まれた二人目の子供のほとんどは、殺されるか、生まれながらにその存在を否定されるかのどちらかに分けられる。もちろん戸籍が残ら

ないのだから学校にも通えず、成長しても仕事に就くこともできず、生きていればほとんどの人間が犯罪者になる。

生まれながらに戸籍上は存在せず、いつかは悪さを働く幽霊のような子供。そんな私達のあだ名が黒子供へへいハイズ。

そして、私は運悪くへいハイズとして生まれ、さらに女であったがために、跡取りにもならないという理由で、家族のための奴隷にされたのだった。

私の精神がさらに深く、深く沈み込む。普段は心の内側のその奥底にしまっている、懐かしい、初めての殺しの記憶。私の中の悲しい記憶とどす黒い感情が心の中で渦を巻く。それは激しい波となって覚醒しそうになった私をさらに引きずりこむ。黒い海の底に引きずりこまれた先は、やはりさっきの子供のころの記憶の続きだった。

私の背中のみならずがさらに激しくなっていた。私の頭は後ろから迫ってくる誰から必死に逃げろと叫んでいるのに、私はただ震えていることしかできないでいた。

足音がどんどん近づいて、とうとう私を追い越した。そして、私を追い抜いた大人に私は見覚えがあった。

うずくまっている私を追い越したのは私のパーパだったからだ。

私を追い越したパーパが振り返る。私はその場にうずくまっていたまま、手で顔を隠す。パーパは私のことに気づかなかったのか、それとも奴隷だった私が死んでもかまわなかつたのか、とにかく私をチラリと見ただけでまた川のほうへと走りだした。

私は息を吐いてから、遠ざかっていくパーパの背中が見えなくなるまで、そこに座りこんでいた。

ふと私は気持ち悪いまでの背中のみずみずが無くなっていたことに気づいた。

吐き気をもよおしそうなほどの、背中のみずみずの原因はパーパだったのかと、納得している、私の後ろから何かが発射したような激しい音がした。

その大きな音に驚いた私が後ろを振り向くと、空から岩の塊のようなものが、私の頭の上を通り過ぎたのが見えた気がした。

実際は音速を超えるその砲弾を見ることを私は出来なかったはずだけれども、とにかくにかの塊が私の上を通り過ぎ、パーパが向かった川のほうへと飛んでいったことだけはわかった。

不意に激しい風と、身を焦がすような熱が私の身体を襲った。

吹き荒れる嵐のような衝撃波は、まだ小さい私の体を台風で吹き倒される稲の穂のようになっけなくひっくり返した。

激しい衝撃波でひっくり返った私はそのままコロコロとボールのように転がされた私の身体は勢いよく木に背中から打ち付けられた。

私は木に打ち付けられた衝撃で、私の背骨が軋んだ。私の空っぽの胃袋から胃液と唾液が混ざった液体を吐き出した。

私は自分がここ最近何も食べていなかったことを思い出して、少しだけそのことに感謝した。いつも酔いつぶれていたパーパの色々混ざったゲロに比べれば、私が出したそれはとてもキレイに見えたからだ。

そして、また突然に私の記憶は途切れる。

私は夢の中で思い出す。私の人生を変えたあの日から父親も兄も姿を消した。

あんな地獄絵図のような極限状態の中であの呑んだくれで、ロクデナシだった父親が  
まともに生きていられたとは考えづらい。

私を見捨てた父親はきつとどこからとも無く飛んできた戦車の砲撃で、身体を粉々に  
引きちぎられ吹き飛ばされたか。もしくは他の人民解放軍の兵隊にでも撃ち殺された  
ことだろう。

また、私によくイジワルをしていたわがままな私の兄も兵隊に殺されたか、家を戦車  
の砲撃で撃ちぬかれたときに死んだのかもしれない。

真相はどうあれ、あの男も兄も私以外の村の人間はみんな死んだことだけは事実だつ  
た。

何年かした後、私は自分が住んでいた村が、なぜ人民解放軍に襲われるに至った経緯  
を知る機会を得た。

私が小さいころ、よく大人たちが毎晩、集まっていたのを覚えている。小さいころの私は何か楽しいことをしている、ぐらいにしか考えていなかった。

実際のところそれは圧政を強いる地方政府への革命の計画だったらしい。

私が小さいころに地方への革命を企てるころは少なかつた。

小さなころの私の村が起こそうとしていた計画は、当時としては大規模なものだったらしく、何箇所かの村を巻き込んだ大規模なものになる予定だったらしい。

革命、といえば聞こえはいいが結局のところ自分達のわがままを通すために村の人々は一致団結し、地方政府へ武力的な手段を用いる、というお粗末な計画だった。

そのお粗末な計画を企てていたと知ったとき、私は思わず笑ってしまった。

いくら、地方政府が汚職にまみれ、自分達の生活を苦しめていたとしてもハイハイズを奴隷のように使い潰していた自分達がさらに豊かになるために、革命を起こすというおろかな発想に、私は笑ってしまったのだ。

しかし、今となつては中国のいたるところで腐敗政治からの弾圧に耐えかねた人民の

不満から起こる革命運動や。少数民族を管轄する自治区が行う民族浄化という名の人民虐殺への報復として、反政府運動や反政府テロ活動などが水面下で起こっている。

ゆりかごのような揺れる眠りの波に私は再び引つ張られた――。

今の私は浅い眠りの海にいる。浅瀬のように夢と現実の狭間で私はまた昔の記憶に引き戻される。

小さな私は痛みで目が覚めた。

爆風で打ち付けられた私の身体は焼け付くような痛みと、ひりひりとした鈍痛とで私の頭はぼんやりとして、はっきりとしない。

「やあ、お嬢ちゃん。お目覚めかい？」

私はモヤがかかったような頭でその声の方に顔を向けた。

「あの砲撃の中で生きてたお嬢ちゃんに興味があつてね」



私はモヤのかかった頭を振り、目を開けた。

私の目の前に軍服を着込んで銃を持った数人の男たちが、へらへらとたるんだ顔をしていた。

私はその兵隊たちの顔を見て、嫌な気分になった。

なぜなら私のパーパが私にイタズラするときに見せる顔にそっくりだったからだつた。

「この女を知ってるかい？」

兵隊たちの真ん中で偉そうに軍服を肩にかけている大男が指をさす先には、服を脱がされた、嗅ぎ覚えのある生臭いを放つ、ススと泥にまみれた女が倒れていた。

私はその女を見た瞬間、怒り、悲しみ、喜び、哀れみ、どうやつても表現できない感情が私の心と頭をかき乱した。まるで、無理矢理に檻にいれられた虎がところかまわず檻の中を引つ掻き回すように、私の身体の中はぐちゃぐちゃになっていた。

「マーマ……」

軍服を肩にかけている男が眉をあげ、一瞬驚いたような顔をしたあと、口の端をあげ

てて、歪んだ笑みを見せた。軍服を肩にかけている男が顎をしゃくる。近くにいた一人の兵隊が何かを察しつたのか「ダオ！」と敬礼をしてから他の兵隊たちを押しつけてどこかへと消えていった。

「普通、自分の母親がこんな目にあつていたら怒つたり、泣いたりするもんだけど、お嬢ちゃんは元氣だねえ」

軍服を肩でかけた男は胸をポケットからタバコを取り出して、口に咥えると隣の兵隊が「大兄へダーグー」とライターを取り出してそのタバコに火をつけた。

「これから一つ実験をしたいと思う。いいかいお嬢ちゃん？」

さつき大兄に敬礼をした男が手に拳銃を持って戻ってきた。

「残念なことにこの村はわれわれ中国共産党にケンカを売つた。俺たちはその間違つた考えをただすため。また他のやつ等への見せしめのためとわざわざこの村を蹂躪してきた。そして、とてもかわいそうなことなんだが、この村の人民達には全員死んでもらわなければいけない、わかるかいお嬢ちゃん？」

大兄と呼ばれた男の話していることは私には難しくって半分以上わからなかつたけれども、ここで首を縦に振らなければ、自分が殺されることだけはなんとなくわかつて

いたので、私はにたにたと楽しげに笑う大兄の顔をまじまじと見つめながら頷いた。「頭の良いガキは嫌いじゃないぜ」

大兄は私の頭を乱暴になでてから、拳銃の装填を確認し。銃弾を一発だけ込めて、撃鉄を起こしてから、私の手にしっかりと握らせると「コイツを殺せばお前だけは助けてやる」大兄は私の耳元でつぶやいた。

大兄によって私の手に握らされた拳銃は私の手の中でずしりとその重さ主張していた。

「さあ、よく狙うんだ」

大兄が私の頬に顔をつけ、私の手を上からしっかりと握り地面に倒れているママに照準をつけさせた。そこで、私は倒れているママと目があつた。

ママは意識がはつきりしてきたのか、私の顔をまじまじと見つめると赤ちゃんがいやいやするみたいに首を横に振った。

きつとこれから自分がどうなるのかをなんとなくわかつたのだろう。ママは「やめて、やめて」と振り絞るようなかすれた声をだした。

大兄はマーマが私に助けを請っているのを見て私の耳元で「どうする？」と聞いてきた。私は大兄の言葉を気にすることなく、拳銃を握り締めたまま、一步、二歩とマーマに近づく。

大兄は私のそばから離れ、私の後ろに立った。

私は助けを請うマーマに向かって笑顔を見せた。マーマは私の笑顔を見て安心したのか「ふっ」と息を吐いた。

私もマーマに釣られて息を吐いて、拳銃をマーマの頭に向けて引き金を引いた。

「ドン」という乾いた銃声と、するどい痛みにはかなり驚いた。銃を撃てば弾がでてくるのはわかっていた。だけれども、その衝撃がこんなにも激しいとは思わなかったからだ。たぶん私が手にした拳銃を撃ったとき、きつと私の身体は少し空中に浮いただろう。

その銃の衝撃のせいなのか、私の右腕は力がぬけ、握り締めていた拳銃が地面に転がり落ちた。どうやら、私の肩が銃弾を発射した衝撃で外れてしまったようだった。

それから私は銃弾を打ち込んだマーマのほうを見ないように顔を背けてから、しりも

ちをついた。なぜだか急に足の力がぬけたからだだった。

急に私の後ろで見ていた大兄や周りの兵隊たちが一齐に笑い出した。

私は自分が弾を撃ち込んだママのことなど気にもせず、一齐に笑い出した兵隊たちのほうへ振り返った。

私には自分がママを自分の手で撃ち殺したことよりも、私の後ろで笑い出した兵隊たちのほうが不思議だった。

「お嬢ちゃん、なかなかいい腕をしているな。名前はなんていうんだい？」

大兄は地面に転がった拳銃をひろいあげた。

「名前、ない」

私は痛い肩を押さえ、少しずつ熱くなってきた身体を冷ますように鼻と口で激しく呼吸をしながら答えた。

「もしかして、黒子供か？」

大兄の問いかけに私は黙って頷いた。

まともな教育を受けていない私でも、毎日のように色々な大人からひどい扱いを受け

るときに言われている黒子供という言葉だけは知っていたからだつた。

大兄は頷いた私に駆け寄ると、急に私の身体をかついで大兄の肩に乗せた。

「お前、俺の部隊に入るか？」

私は大兄の質問にまた黙って頷いた。大兄は楽しげに私を肩に乗せながら、私が銃弾を打ち込んだマーマのほうに近づいた。

「お嬢ちゃん、これじゃマーマを殺したことにはならないぜ？」

私はまた黙って頷いて大兄の肩から私が殺し損ねたマーマの姿を見下ろした。

マーマは私に拳銃で撃たれる前と同じ格好で、地面に倒れていた。

さつきまでと違うのはマーマの頬つぺたからは血が流れ、真つ赤な泡を吹いていた。

大兄は私の兄が悪いことをするときのような楽しそうな笑顔を私に見せた。大兄はマーマの頭に自分の腰から取り出した拳銃を取り出して、一発、二発とマーマの頭めがけて銃弾を放った。

大兄に撃たれたマーマは二、三度とからだを短くぶるぶると震わせる。口から吹いていた真つ赤な泡のかわりに真つ赤な血が流れ出し、頭は割れたスイカのように中身が見

えていた。

大兄はその光景を私に見せると満足そうに「コレで殺したことになる」と笑った。

そこから私の夢は加速する。

きつと私の目覚めが近いのだろう。覚醒し

かけた私の脳みそが、早送りされる映画のようにどんどん記憶のなかを駆け巡って、断片的な記憶のかげらを私に見せる。

大兄は中国の特別暴徒鎮圧部隊「暗夜之虎」の隊長であることを知ったり。名前の無かった私は部隊の名前から一文字とり「虎へフー」と名づけられたり。

地獄のような訓練に耐え一人前の兵隊となったり。暗夜之虎で同じように暴徒鎮圧という名の虐殺をおこなったり。

暗夜之虎を裏切って開放革命軍に参加したり。

そこで開放革命軍の指令、王と恋に落ちたり。

そして私は目を覚ます――。

私の寝起きは最悪で、夢の残滓が寝ぼけている頭にこびりついていていようだ。それでも少しずつハッキリとしていく意識が私が見ていた夢を少しずつ忘れさせていく。

私は何の夢を見ていたのだろう。きっと子供のころの初めて人を殺した、あのときの夢に違いない。

私にこんな夢を見せるのは中東アジア特有の生暖かい湿った空気のせいか。あるいは犯罪の巣窟、ロアナプラの毒気に当てられたからか。

私はホテルのカーテンの隙間から差し込むまぶしい日差しを手でさえぎりながら、今まで頭に敷いていた枕の下からコピー品のトカレフを取り出して、生まれたままの姿のままシャワールームへと向かうことにした。

寝ている間にかいた汗といやな記憶をシャワーですっきりさせたいからだ。

私はトカレフをシャワールームの中に持ち込み、シャワーカーテンを半分だけ閉めて



ノズルを回す。

シャワーカーテンを半分だけ開けるのにはそれなりの理由がある。それは仮に敵が入ってきたときに、すばやく気づくためであり、半分だけカーテンを閉めるのは水気の多いシャワールーム内でコピーのトカレフをぬらして、万が一の動作不良を起こさせないためだ。

どちらにても、私がシャワーを浴びているときに敵に襲われたらそれは絶対絶命の場面で、たとえ、銃を持っていたとしても何の役にも立たないかもしれない。

でも、シャワールームの中にある、びしょ濡れになっていないトカレフは中国製のコピー品だとしても気休めぐらいにはなる。枕の下に置くトカレフも、半分だけ開けるカーテンもいつ襲いかかってくるかもしれない、敵から身を守るための最低限の護衛術だ。

いくら、三合会が私たちのために手配してくれたホテルだといえども注意を怠ってはいけない。

私はそんなことを考えながらノズルを捻りシャワー口からお湯が出るのを待っていた。

ほどなくしてシャワー口から熱いお湯がでる。いつも冷たいぬるま湯に慣れていた

私は久しぶりの熱いシャワーに喜びながら私は熱いお湯を頭から浴びた。

暖かいお湯がいつでも出る高級ホテルなんてこのロアナプラには少ない。さすがは香港最大のマフィアと感心しながら久しぶりの熱いシャワーを味わう。

ジャングルや、山岳地帯、紛争地域で雨水で身体を洗うしかない日々になれば犯罪都市ロアナプラの中にいるといえど、この瞬間は天国にいるかのようだ。

私は手早く自分の身体を洗いながら、改めて女性らしくない自分のプロポーションに軽い失望を覚えつつ、それを手でさわりながら再確認する。

女にしては肩幅ががちりとしているし、激しい訓練のせいなのか、私の身長は男のように高くなった。その代わり胸は小さくなってしまい、男のような体つきをしている。きっと今の私がショートカットの髪をさらに短くし、男性のような短髪にして、男物のスーツを着てネクタイをしめたら誰も私を女とは思わないだろう。

なぜ、こんな私をあの人を愛してくれるのだろうか。

私が現在所属している、開放革命軍はその名の通り中国共産党からの解放と腐敗した

一党独裁体制を破壊すべく、設立されたレジスタンスだ。

もともとは政府に弾圧された少数民族が中心で設立され、政府へのゲリラ的なテロを行うテロ組織だった。政府要人を狙ったテロや、反政府運動への援助などを中心に行っていたテロ組織がいかにして、義勇軍のような開放革命軍という名を名乗るにいたったか。それはひとえに中国共産党が国内外に敵を作りすぎたからに他ならない。ここ最近の中国国内の汚職と、国内の格差、暴力的な圧政などへの人民の不満。

他国への侵攻の手をいまだに緩めようとしない強硬姿勢など、今の中国は敵には事欠かない状況になっている。そんな状況で開放革命軍は若者や、弾圧されてきた少数民族などの心を掴み仲間を増やし続け、小さなテロ組織から脱却するに至った。さらに幸運なことにさまざまな機関が私達を利用しようとスポンサー協力してくれたことにより、豊富な資金を得るに至った。

豊富な人員と、豊富な資金。

そして、何よりも私の恋人でもある。開放革命軍のリーダー王の手腕により、開放革

命軍は確実にその力を大きくしていた。

今回、私が数人の部下を連れてロアナプラに来たのも組織をさらに強固にするべく、王が出した指示だった。

私たちはこのたび豊富な資金の一部を使い「海運の巨人」である国際的武器運送会社、H C L I社と武器の取引を行うに至った。

私はノズルを占めシャワーのお湯を止める。備え付けのタオルで髪を拭い、身体を拭く。不意に私は鏡に映った自分の顔に驚いた。

笑っていたのだ。

それも母お殺したとき同じく、楽しそうに歪んだ笑顔で。

私は量の頬を手で挟むようにはたいた。

「集中しろ」と私は心の中で自分に毒づく。しかし、私は自分の顔が緩むのを抑えられない。

私はこの状況を楽しんでいる――。

私が暗夜之虎を裏切りまだ小さかったころの開放革命軍に参加していく年。

どんどんと拡大していく組織の中で、友が死に、何人もの部下が死んでいったが、それでもどんどん仲間が増えていった。小さなテロが、どんどんと大規模なものになり、すでに一部の地方は私たちが開放したといってもいいような状況にすらなっていた。

そして、今。私達は「海運の巨人」と呼ばれる世界一の武器商人と契約を交わせるまでに成長した。

私にはそれがたまらなくうれしいのだ。私の愛する男である王がその才能を遺憾なく発揮し組織を大きくしていったこの状況が。

まるで一から国を立ち上げた三国志の英雄たちのようにどんどんとその力を強めていく彼の姿が。

私は王のために、開放革命軍のために戦おう。

私の中で戦いへのスイッチが入ったのか、緩んでいた顔をひきしまる。

そのためにも今回の取引はなんとしても成功させねばならない。

私はワイシャツの袖を通し、糊のきいたスーツを身につけ軽く化粧をしながら、化粧台の上においてある資料に目を通した。

ここまでできて私がヘマをするわけにはいかない。

私は何度も目を通して覚えてしまったココ・ヘクマティアルの名前を声に出してよんでみた。

## 第二話 青天霹靂

腰までのびたココのきれいな銀髪が潮風にたなびいている。

知らない人が見れば美人のココが船に揺られ何かを考えているように見える、と思う。

毎日、ココにべつたりのバルメがこの姿を見れば「海を見て、たそがれるココ。ステキです！」と目をキラキラさせて言いそうだ。

いつものココならニコニコ笑いながら、僕やみんなに冗談を言っているはずなのに、今はとても暗い顔をしてる。

ココは船のデッキの手すりに身体をあずけて、干されたシーツのように身体の半分を折り曲げてうなだれている。

「そんなことしていると海に落ちるよ、ココ」

僕は高波で船が揺れたら海へと落ちていってしまいそうな、ココを見て思わず

声をかけた。

「大丈夫だよ、ヨナ。私が海へ落ちたら、きつとバルメあたりが海に飛び込んで助けてくれるから心配ない」

僕は心の中でココに同意して頷いた。

「そんなことよりヨナ。あそこにある仏像が見えるかい？」

ココは手すりにつかまったまま、僕を引き寄せて後ろから抱きしめると海を指をさした。

僕はその指の先にある大きな仏像を見つけると「うん」と小さく返事をした。

「アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない、恥辱のあまり崩れ落ちたのだ」

ココはほとんど独り言のようにつぶやいた。僕はその言葉の意味はわからな



かったけれど、何か言わなきゃいけないような気がしたのでさつきと同じように「うん」と小さく返事をすることにした。

「ねえ、ヨナ。どうしてあの仏像は崩れずにいれると思う？」

僕はココのその質問の意味もわからなかった。でも、とりあえず頭に浮かんだことを口にする。

「……丈夫だから？」

僕の言葉を聞いてココはだまった。

僕は何か間違ったことを言ったのかもしれないと思って、ココの顔を見上げると、ココは頬つぺたを膨らませて、笑いを堪えるのに必死な顔をしていた。

僕はなんとなくココのその笑いを堪える顔に腹が立ったので、そつぽを向いて海のほうを見た。

ココはそんな僕の態度も面白かったのか、とうとう笑いを堪えられなくなつて大きな声で笑い出した。しかも、目にうつすらと涙さえ、浮かべて。

いくら僕を雇っているココといえども、馬鹿にされたように笑われるのはやっぱり腹が立つ。

ココの大きな笑い声を聞いてバルメやレーム、ルツやトージョ、部隊のみんなが集まってきた。

「ああ、ココ！ こんな状況でも笑っていられるココはステキです！」  
バルメが目キラキラさせて笑うココに抱きつく。

「ココ、何が一体そんなに面白いんだ？」  
トージョがココにつられて笑う。

「また変なこと言ったのか、ヨナ坊」  
ルツが僕の頭を手をおいてくしゃくしゃに撫でた。

「まあ、こんな状況でも笑っていられるって、のはいことだ」  
けたたましく鳴り響く火災警報ともくもくと僕たちが乗っている船から上がる白い煙を見上げながら、レームはタバコの煙を吐き出した。

僕は武器商人と旅をした――。

僕は本当は銃が嫌いだ。なぜなら、僕の両親は銃に殺されたからだ。

それでも、僕は銃を手放すことができない。なぜなら、僕の身を守るためには銃は必要不可欠なものだからだ。

僕は訳あつて武器商人のココ・ヘクマティアルといつしよに世界中を旅している。

僕は世界中でたくさん武器を売りさばいているおおきな武器運送企業、HCL社のキャスパー・ヘクマティアル——ココにそっくりな兄と〈特別〉な契約を結んだ僕はココの警護をするためココについていき、世界中を旅することになった。

とてもお金持ちで、さらにたくさん武器を売りさばいている武器商人のココの命を狙う人間はとても多く。それは殺し屋だったり、どこかの国のエージェントだったり。

そんなココの命を狙うやつらを追い払ったり、殺したり。取引の邪魔をするやつらをけん制するために、僕たちは雇われている。

もちろん、武器商人でお金もちのココが雇っている兵隊はみんな優秀だ。

いつもタバコばかりすっている年長者の部隊長レームと、両方の耳の上に剃りこみを入れた爆発物のヤバイ使い手であり、語学の先生のワイリ。この二人はアメリカのエリートばかりが集まるデルタフォースの出身で、ココとは古い付き合いらしい。

それから暇さえあればココにべったりくっついてるバルメは、いつも右目に眼帯をしているこの部隊の唯一の女の人でも、元々はフィンランドの偉い軍人だったらしい。僕も何回かバルメに格闘術の相手をしてもらったけれども、バルメのナイフを使った格闘術は恐ろしく強い。もしかしたら、世界一かも。

次に、僕の苦手な数学を教えてください、日本人のトージョ。

トージョは眼鏡をかけていて日本の自衛隊という軍隊じゃない軍隊に所属していたとこの前、僕らが日本に言ったときに詳しく教えてくれたけれど、僕には意味があまりわからなかった。

次にマオ。この部隊で唯一、家族がいるマオ。僕に理科を教えてください、たま

に理科の授業の合間に僕に家族の写真を見せてくれた。

それから、されにどんな車もレーサーみたいに操る凄い技術を持っているウゴ。ゴツイ身体で世界最大口径のデザートイーグルを片手で扱える。

最後に、腕のいい狙撃手だけれども、お調子者でよく尻に弾が当たるアメリカ人のルツ。

少し前までもう一人、僕とココを守って死んでしまったアール。

総勢八人で僕たちはココを護っている。

本来ならばココの兄である、キャスパアの担当であるはずの地域なのだけれども、日本の東京で起きたH C L I社とライバル関係にあったS R班というトージョが昔、所属していた自衛隊の秘密部隊と日本で戦い、壊滅させるまでに至った。

そして日本からタイに向かい、ヨーロッパに帰る道すがらココはキャスパーからお使いを頼まれた。

本来なら兄とはいえキャスパーの頼みなんてきかないココが珍しく、その頼みを聞いたのはタイ近くの海域での武器の受け渡しという簡単な仕事だったからだ。

ココも簡単な小遣い稼ぎのつもりで請け負った仕事だったらしく、本当なら一日で終わる仕事のはずだった。

しかし、さすがのココもその武器の受け渡しの途中で、船が故障するとは思っていなかったらしい。

僕たちが乗っているHCL I社が所有する貨物船が突然火を噴いた。船が沈んでしまうほどの激しい爆発ではなかったけれども、武器商人のココが運んでいるものが運んでいるものだけに僕たちは急遽近くの港に停泊することになった。

でも、その港の場所が最悪だった、らしい。

その街の名はロアナプラ。

僕は詳しく知らないのだけれども、レームが言うには悪徳と野心、頹廢と混沌とをコンクリートミキサーにかけてブチまけたような犯罪者のゴミだめのような街だそうさ。

ひとしきり僕のことを大笑いして満足したのか、ココは「あー可笑しかった」と目にたまった涙を拭いた。

別に僕はそんなに皆に笑われるようなことを言ったつもりは無かったので、少し不機嫌になった。

「ところでレーム。あの運び屋覚えてる？」

ココはいつも仕事で使っている重そうな、イリジウム衛星携帯電話を手に持っている。

「ああ、覚えてるよ。もう五、六年前になるかな。ロアナプラの近くに武器を届けるときに使ったあの運び屋だろ？」

ココは携帯を持っていないほうの手を回して「そうそう」と上機嫌そうに答えた。

僕はそんなココの顔を見上げた。ココはいつもこういった不測の事態に陥っても、商談相手に殴られても、笑顔を絶やささない。

笑顔で自分の本性を隠し、相手を威圧する。それが、ココのやり方だ。

しかし、それでもココと付き合いの長い僕たちはその笑顔の中に隠されている、勘定の欠片をちらりと感ずることぐらいはできる。

たぶん、今のココの笑顔は楽しい感情からではなく、不幸な状況にみまわれた



怒りの感情、やけくその笑顔だ。

僕たちはみんなそれに気づいているけど、あえて黙ってココを見守っている。

「実はあのときの運び屋の一人に化粧品をたつぷり押し売りしたんだよね

……」

「もう、忘れられてるよね？」ココはイタズラした子供みたいに笑った。

「いや、あのソードカトラスぶら下げた二丁拳銃ヘトウーハンドの威勢のいい姉ちゃんら、きつと覚えてるだろうよ」

レームはそんなココにニヤニヤとした笑いながら答えた。

「……だよねえ」ココはがっくりと肩を落とす。

「でも、今はそいつらを頼るしかないんだろ？」

ルツがココが握り締めてる携帯を指差した。

「もしもココに何かあつたら、私が誠心誠意、お守りしますから大丈夫です

よ」

バルメがココにうれしそうに笑った。

僕はそんないつもの光景ぼんやりと眺める。僕は一瞬、何か妙な気分——この

気分を口にするのはとても難しいんだけど——海のほうへ視線をそらすと小さな黒い影が動いているのが見えた。

「ココ、なんか来てる」

僕はさつきより大きくなった影に指をさした。

海の上で動く影が少しずつ大きくなっていく。何かが僕達の船に近づいているのだ。

「さすがヨナ君。いい目をしてるな」

レームが首にかけていた双眼鏡を覗き込んで影のほうを見た。

レームは「はあ」と大きなため息をついて、自分が持っていた双眼鏡をココに渡した。

ココはレームから双眼鏡を奪い取るように受け取るとココは「げっ」と小さく悲鳴を上げた。

「二艘、二艘……四艘。あー、まだまだ増えるか……」

「さすが犯罪都市ロアナプラだな」ワイリは目を凝らしてのんきに海を見つめ

る。

「まあ、確実に俺ら狙いだろうけど、お嬢どうする？」  
ルツが楽しそうにココに尋ねた。

「ココ、ロアナプラの海賊相手にうちの流儀を教えてやりましょう！」  
「あーあ、かわいそう海賊さんたち」

僕は手すりを握り締めたままのココを見た。ココの後ろ姿はプルプルと怒りで肩をゆらしている。

相変わらず白い煙を上げる僕たちの船を、静かなロアナプラの波が揺らす。

最初は小さかった海賊たちの船はどんどんその影を大きくしながら、白い飛沫をたてながらまっすぐに僕達の船のほうに向かってきている。

「それじゃあ、いきますか」

レームが唾えていたタバコを海へと吐き出した。

「とことんやってやろうじゃないの……」ココはつかまっていた手すりを強く握りしめると、お腹の底から、爆弾が爆発したみたいな声を出した。

「全員、行動開始！」

## 第三話 重温旧交

今回は今まで以上にめんどろなことになるそうだ。

俺たちが住むロアナプラにはそぐわない、H C L I社所有の輸送船が港に停

泊している姿に、俺は久しぶりに頭の芯が沸騰するような熱と「メイドの狐狩り」以来に感じる心の奥底に覚えた、いいようのない興奮を自覚して、俺は思わず顔をしかめた。

H C L I社。俺がまだ旭日重工の社員で岡島緑郎という名前だったときに何度となく聞いた名前だ。

別名「海運の巨人」と呼ばれるH C L I社はその名の通り海路を使って世界中に武器の運送をしている世界最大級の会社だ。扱っている商品は銃弾、拳銃、機関銃、ミサイル、戦車、戦闘機と一社で戦争を起こせるほど豊富に所有している。さらにはH C L I社は子会社として民間軍事企業を所有していることでも有名であり、死の商人として恥じない仕事ぶりだ、世界中にたくさん死を今もばら撒き続けている。

そんな大手メジャーな死の商人が犯罪都市ロアナプラの港に停泊している。

俺が知る限りでこれほどまでに最悪の組み合わせはない。

せいぜい、非力な俺が出来ることといえば、いつ爆発するかわからない爆弾を核爆弾たつぷりの火薬庫の中に放り込む——そんな核爆発級のトラブルがこの街に起こらないこと願うことぐらいしかできない。

すでに、HCL社はその爆発の威力を港に着く前に、俺たちに垣間見せてくれた。

煙を上げてロアナプラの港に向かう輸送船。

犯罪都市ロアナプラの住人にとってコレほどまで美味しいカモはない。

まさに、カモがネギを背負ってやってきたというやつだ。しかも、わざわざご丁寧に鍋まで持って料理する手間すら省いてくれている。

もちろん、これが普通の輸送船であったのなら海賊達は今ごろ、意気揚々と戦利品を片手に酒場へイエローフラッグで浴びるほど酒を飲んで

たくさんのお女をはべらせていたことだろう。

まあ、少なくとも彼等が生きていたであろうことに違いない。

しかし、今回ばかりは相手が悪かった。

白い煙を上げて港へ向かってくるHCL社（HCL社）の輸送船。それを追いかける十二艘、所属もバラバラの海賊たち。普通の輸送船なら俺が乗っていた船がやられたように荷物はすべて奪われ、人員は人質として身代金を請求されるための交渉材料になるか、あるいはほろ雑巾のように殺されるか。

運がよければ裸で海に放り込まれるか、だ。

だが、さすがHCL社。ただの輸送船としてはありえない武装の数々で襲い来る海賊のすべてを、まるで巨人が小人を踏み潰すがごとく、圧倒的物量で粉碎していった。

その姿はガトリングガンで次々に敵をなぎ倒すスタローンか、シユワルツエネツガーか。はたまた貿易センタービルを破壊したUFOか。

とにかく、十二艘もの海賊船はまともに近づくことすら出来ずにやすやすと海の藻屑となったのだった。

圧倒的火力と情け容赦のない攻撃にさすがのロアナプラの人間も震え上がったのか、今のところHCL社の船を襲おうとする気配はない。

それがいつまで続くかはわからないが……。

「〈死の商人〉とはよく言ったものだが、最近では戦争のデリバリーもやっているみたいだぜ、ロツク」

俺の同僚にあたるレヴィが未だに燃えている海賊船の残骸に指をさして、鼻で笑う。

「レヴィくれぐれも【失礼】のないように頼むよ。相手はH C L I社の社長の実子でもあるココ・ヘクマティアルだ。もしも、粗相があつて万が一、ココ・ヘクマティアルが殺されるなんてことになったら、此処はすぐさまグランド・ゼロに早代わりだ」

レヴィは手をひらひらさせながら「わかつてゐるって」とへらへら笑つた。

「以前もココ・ヘクマティアルと仕事をしたそうだから、大丈夫なんだよな?」

「ああ、あの時は直ぐに終わったからな。まあ、アタシはずいぶんなものを売りつけられたけどよ」

レヴィが眉間にしわを寄せて明後日の方向を向く。どうやら、よほど思い出したくない物らしい。

「へえ、一体何を買わされたんだい。レヴィ?」

「さあな……」

「武器……じゃなさそうだし。まさか、化粧品とか?」



俺はレヴィをからかうつもりで笑いながらいった。普段から化粧をする——血化粧はいつもしているが——気配のないレヴィと化粧品を組み合わせは考えられない。

いつも、腰にぶら下げた二丁のデカブツをいじるか、酒を飲むか、金を賭けるか。そんなロアナプラ的健康生活を送っているレヴィが化粧の組み合わせはありえない。

俺流の活かしたジョークのつもりだった。

君子危うきに近寄らず、とは言うものもこのロアナプラは踏まなくつても爆発する、地雷原そのものだ。一步ふみだしても爆発するし、何もしていなくても爆発する。

レヴィは腰に二丁ぶら下げたソードカトラスが収められているホルスターに手をかけた。

「おい、ロック」レヴィがずかずかと近づいてきてソードカトラスの銃口を俺にむけて笑う。

「これ以上うだうだ言うんなら、てめえの小さいケツの穴を鉛球で拡張してから、何個か糞がしやすいように、ケツの穴増やしてやろうか？」

俺は両手をあげて降服のポーズをしながら、笑う。

笑うしかないから、笑う。

俺が昔住んでいた日本なら銃が出てくるだけで一大事だ。しかし、ここロアナプラでは銃は子供のおもちや、銃声は子守唄みたいなもので「あつて当たり前」のものだ。

だから、ここでレヴィが銃を抜くのも見慣れた光景なのだが、俺たちの客になるココ・ヘクマティアルの前ではやめてほしい。

いくら稼いだ金の使い道がない俺でも、せっかく入った仕事なくなるのは、さすがにいい気持ちはしない。

俺はただただ困ったように笑って「悪かった」と素直に謝った。

どんなに理不尽な理由であろうと、道理が通らなかるうが、女性が怒ったときにはすぐさま謝る。これは、全世界共通の男の処世術だろう。

レヴィはそんな俺の態度に呆れてか、大きく舌打ちをしてきびすを返す。

これで、依頼が破棄されることはなくなつたようだ。

それに俺の寿命も延長されたようだった。

「まあ、化粧してドレスを着たレヴィを見てみたいきもするけど」

俺の足元に銃弾が飛ぶ。

俺は思わず蛙のように飛び跳ねた。幸い俺の身体に風穴はあいていなかったが、俺の股の下にはコンクリートにめり込んだ鉛球が煙を上げていた。

「次は、ない」

レヴィに聞こえないようにつぶやいたつもりだったのだが……。俺は一瞬、レヴィの顔が上気していたような気がしたが、たぶん俺の気のせいだったのだろう。

「いやー、お久しぶりですー」

学芸会のそれに近いような、なんとも感情の入りきっていない台詞が頭の上から降ってきた。

港に停泊したHCL I社の輸送船から白銀の髪を腰まで伸ばし。真つ白なスーツを着た令嬢——と思わせるだけの上品な空気を見に纏わせている女性、ココ・ヘクマティアルが船に備え付けてある階段から下りてきた。

その顔は昔見たときよりもずっと大人びていた。と、言っても俺が見たのは資料に添付されていた写真で、この年齢で武器商人をやっているのか、と驚いた覚えがある。

「始めまして、ミス・ヘクマティアル。俺はラグーン商会から来ました、ロツクといいま  
す。そして、こつちが——」

「お久しぶりです、レヴィさん？」

ココ・ヘクマティアルがレヴィをみてにつこりと笑う。俺はなんとなくその笑顔の奥に、妙な緊張を感じた。

「久しぶりだなあ、嬢ちゃん。この前のブツのおかげでお肌ツルツルだ」

レヴィが厭味たつぷりに俺の肩に肘を乗せて「今回は子供銀行じゃなくても良さそう

だな」と悪態をついて睨んだ。

「そういえば、以前いつしよに仕事をしたそうぞ。ミス・ヘクマティアル？」

俺は悪意はない、という意味で右手をさしだした。

「ええそうですよ。ミスター・ロック」

ココ・ヘクマティアルは俺の右手に左手を添えて柔らかく握手を返す。

さすがは武器商人。自分の美貌すら武器にするのか、と妙に感心してしまった。

「では、ミスター・ロック。さつそくラグーン商会の事務所につれて行って頂いてもよろしいでしょうか？」

ココ・ヘクマティアルはそう俺に伝えるときびすを返して一緒に下りてきた部下に何か指示を出している。

「おい、レヴィ」俺はどうとうタバコを啜えはじめたレヴィへ、ジツポライターに火をつけて差し出した。

「ああ、わかっている。手はださねえよ、今は」

レヴィは「今は」というところを強調してから、タバコの煙を吐き出した。

「ミスター・ロック、よろしいですか？」

部下に囲まれたココ・ヘクマティアルが手を上げて俺を呼ぶ。下心のある男なら彼女のルックスと、佇まいでいくら高い値であっても、言い値で買ってしまおうだろう。

「私と、部下三人。あわせて4人でお伺いさせていただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

ココ・ヘクマティアルは自分の周りにいる三人の部下を紹介してくれた。

眼鏡の東洋人トージョ。眼帯をつけた女軍人、バルメ。そして、銀髪の少年兵、ヨナ。バラエティ豊かといえは聞こえはいいが、どう見てもこの場にそぐわない少年兵の姿に、俺の心はざわついた。

俺はヨナと呼ばれた少年兵の姿に記憶の底から、黒いものが首をもたげるのを感じて目をそらしたが、遅かった。

どうやって、思い出す。いや、忘れてはいけない【可哀想な双子】。誰かが少しだけやさしければ助けられたかも知れない、二人の事を。

「あの……ミスター・ロック？」

「ああ、すいません」俺はココ・ヘクマティアルの声で現実に戻された。それでも、心臓に杭が突き刺さったかのような痛みは消えないようだが。

「じゃあ、アタシは後からそっちに合流するぜ」

レヴィはタバコをふかしながら、H C L I社の船を見上げて言った。

「いいのか、レヴィ？」

「どうせ、お前の車じゃ四人乗るのが限界だろ。それに、お客さんを特等席へトランクへ

に乗せるわけにはいかねえしな。まあ、ロック。お前に乗せるって手もあるが」

「ところでミスター・ロック」

俺の車に部下とともに乗り込んだココ・ヘクマティアルが子供っぽい笑みをを見せて俺に話しかけてきた。

「失礼ですが、あなた日本人ですよね？」

俺はいつ出てくるともしれない、ロアナプラ名物の一つ、悪質な当たり屋に注意しながら「ええ」と短く返事をした。

「やっぱりそうですか！ ちなみに隣のトージョは元自衛隊員だったんですよ」

ココ・ヘクマティアルは俺がイメージしていた武器商人にそぐわない、明るい声を出して、好奇心旺盛に目をキラキラさせている。

「どうも」と助手席に座る眼鏡をかけたトージョが俺に軽く会釈をする。俺も彼に釣られて頭をさげてから、ふと笑ってしまった。

「お互い、日本人であることは捨てられそうにありませんね」

俺の言葉に、トージョは目を細めて「そうですね」と大笑いをして頷いた。

俺たち二人の日本人のやりとりに、後ろの席に座っている三人は、頭の上にクエスチョンマークをつけたまま固まっていた。

「何で平和の国の日本人が、こんなところに？」

銀髪の少年兵、ヨナが車の外を流れる風景を退屈そうに眺めている。

彼のその言葉に悪意がないのはわかっているながらも、俺は平和な日本に生まれてしまったことに、改めて罪の意識を感じた。

俺が住んでいた平和の国、日本。銃を見る機会など無く、子供は学校で学び、遊ぶ。ほとんどの人たちは戦争とは無縁の生活を送っている。

ここ、ロアナプラとは正反対のところだ。

だから俺はロアナプラで、日本人と生きていることに後ろめたさを感じずにはいられない。

「色々あったんだよ。色々ね」

俺はルームミラー越しにヨナ君のまだあどけないその横顔に、死んだ双子の面影を思い出す——俺は記憶のとぼりが目の前を覆う前に、他の事を思い出すことにした。俺がロアナプラに来た、いきさつを。

「事務所につくまでの暇つぶしになるといいのですが……」

隣のトージョがチラリと俺を見る。後ろのココ・ヘクマティアルが身を乗り出したの

がわかった。

俺はもともと日本人の、国立の大学にでて、一流企業である旭日重工の一人の会社員だった。間違ってもロアナプラのような犯罪都市で違法な運び屋をするような生活は送っていない。

仕事は可もなく不可もなく。

まあ、官僚の兄貴や親父に比べれば見劣りをする人生だったかもしれないが、東京と東南アジアを行き来する生活は、今となつては平和な日々だったように思える。

仕事終わりは居酒屋で、酒を。

ストレスがたまればバツティングセンターで、球を。

そんな俺の人生が大きく変わったのは、ラグーン商会に襲われてからだだった。

世界的企業である旭日重工の犯罪の証拠がたつぷり入ったディスクを俺は知らず知らずのうちに運ばされていた。そんな俺が運んでいたチップを狙ったのが、今、俺が働いているラグーン商会だった。

そこからは本当に運命としか言いようがない。



俺を雇っていた旭日重工——俺の上司は機密がたつぷり入ったディスクごと俺を消そうとした。そして、運悪くその消されるリストにラグーン商会の面々が加わったおかげで、俺の人生は決まった。

俺たちを殺そうと追い掛け回す、戦闘用ヘリコプターにラグーン号が積んでいた魚雷をかまし、大団円でめでたし、めでたし。

とはいかなかった。

俺は俺を捨てた上司にキレたし、上司は上司で早々に俺を死人扱いしていた。

すでに葬式の準備まで終わっていた俺が日本に帰れるわけも無く——また、帰る気も無く。

かくして、文字通り生きる屍となった俺は、たまたま見習い水夫を募集していた、たまには、ご法に触れることもするラグーン商会に、めでたく再就職することになったのだった。

再就職先は、ロアナプラにしては優良物件だったが、俺の同僚はどいつもこいつも、自己主張が強いやつらばかりで苦勞をした。

一人は黒髪を後ろで束ねた女ガンマン、レヴィ。いつも2丁のベレッタをカスタマイ

ズしたソードカトラスを腰にぶら下げていることから、あだ名は二丁拳銃ヘトウーハンド。

俺のボスに当たる、スキンヘッドの筋肉隆々な「タフで知的な変人」黒人の大男ダッチ。俺にロツクというあだ名を送ってくれた恩人でブラックラグーン号の船長。

最後に、パソコンと電子戦のプロフェツショナル、ベニー。ウィザード級のハッカーだ。ユダヤ系の白人で車の運転もなかなかなものがある。

そして、俺はこの三人とともにラグーン商会で働くことになった。

そこからは怒涛の日々だった。

毎日のようにサイフはすられるし、買物ではボラれるし。

マフィア同士の抗争には巻き込まれる、未来から来たキリングマシンのメイドに殺されかける。

洗脳された可哀相な双子はロシアンマフィアに殺されて、落ち目のヤクザ一家を壊滅させた。

さらにはメイドの狐狩りに、自分の信念を落つことしそうになる。

俺が日本にいたときと唯一変わらないのは、俺が貫くどんなときでもネクタイを締め

続ける、ジャパニーズサラリーマンスタイルぐらいなものだ。

今回は切った、はったの鉄火場で、武器商人とお散歩だ。

「本当に、人生は何があるかわからない」俺は口の中でその言葉を噛み締めた。

## 第四話 百戦百勝、非善之善者也。

酒とタバコと、コーヒーと硝煙の気持ちの悪いにおいが充満している事務所に、かすかに香る上品な香水のかおり。

僕とバルメとトージョはココが座るソファの後ろで「休め」の姿勢で何が起こってもいいように待機している。

「ハイヤーでお出向かい、というわけには行かず申し訳ない」

ワイリと同じくらい身体の大きい黒人——サングラスをしたダッチと名乗った男がココにコーヒーを差し出した。

「いえ、なかなか楽しい時間をすごせました。ミスターロックのおかげで」

ココは差し出されたコーヒーを手にとって一口、口に含む。「なかなか良い豆ですね」とココは意外そうな顔をした。

「特別な方にしかお出ししない、オリジナルブレンドでしてね」ダッチはココの言葉に満足そうに頷いた。

「で、ご用件はなんでしょうか？」

ココはカバンから束になった書類を取り出してダッチに渡す。「あらあら」とダッチは困ったように口の端を上げて笑う。

「このリストに書いてあるものを明日までにそろえていただきたい」

ココの声が変わる。いつもの軽やかな女性の声から、背筋が凍るような魔女のような声に。ダッチは少しだけ顔をしかめて、手に取ったリストをべらべらとめくりながら「明日までにねえ……」と困ったようにつぶやいた。

「バルメ、ここってそんなにヤバイの？」

僕は隣にいるバルメにだけ聞こえるような小さな声できいてみた。

「それはもう。一言で言うなら最悪です」

「そんなに？」

「日本とは真逆だよ」

後ろにいたトージョが僕に耳打ちする。

「外に出るときは武器を持たなきゃいけない。ここに集まる人間のほとんどが犯罪者ばかり。観光できて棺桶で帰る、そんな物騒な街なのさ、ロアナプラは」

トージョはロアナプラに何か嫌な思い出でもあったのか、僕はトージョの言葉からとげがあったような気がした。

「……どうにかしよう」

ココに手渡された資料に黙って目を通していたダッチは天井を見上げて大きく息を吐いた。

「さすがはラグーン商会。今回も期待していますよ」

ココは手のひらを合わせてダッチにうれしそうに笑って見せる。

「もちろん、報酬は弾みます。ここからさっさとオサラバできるのでしたら」

「そいつは違いねえ」

ダッチはココの言葉に同じ気持ちだと言わんばかりに大きく頷いて見せた。

「さて、そうと決まれば善は急げだ。おいロック！」

ダッチは野太い大きな声を出して、下の階にいるロックを呼んだ。

「このリストにある大部分は、明日までにはどうにかなる。だけれど、残りの分は純正品をお望みなら、取り寄せるまでに一ヶ月はかかると思います」

ぼさぼさの髪と眼鏡が特徴的なベニーと名乗った男がソファアの端に腰をかけながら、ココが渡した資料にペンで何か書き込みながら言う。

「その場しのぎの代用品でよろしいのでしたら、とりあえず明日の昼には全部そろおうでしょう。それで問題なければ、ご希望通り明日の夜にはこことはオサラバです」

「これが代用品のリストです」ダッチの隣に座るロックがココ、ダッチの順に資料を手渡した。

一人で窓際から、つまらなそうに外を眺めているレヴィと紹介された女が「お嬢様にはこんな街は似合わないからねえ」と口の端をゆがめて笑った。そのレヴィの口調をココへの宣戦布告ととったバルメが「私のココを侮辱するなんて許せません」と怒鳴った。「それなら、どうするってんだい？」とレヴィの方もやる気満々で、指の骨をポキポキト鳴らして、バルメを威嚇する。

バルメと、レヴィ。

お互いがお互いの間合いにずかずかと無遠慮に入っていく。そんな二人の様子を、僕とトージョはハラハラしながら、見守ることにした。

僕たちのチームの中で、格闘戦の腕は最強のバルメを僕とトージョは止めることはできない。それにどうやら、レヴィの方もそうらしく、ロックが大きなため息を吐いて天

井を見上げたのが見えた。

しかし、ココはというと、レヴィに言われたことなんて気にする様子も無く、二人の様子をチラリと目の端に収めつつも、ロックから手渡された資料を美味しそうなケーキを出されたみたいに鼻息荒く、興奮して見つめていた。

「この短時間でこれだけまとめるのは流石です！」

ココはロックの資料を手にとつて立ち上がり「後はそちらにお任せします」とソファアールから立ち上がった、その瞬間――。

部屋の電気が一斉に消えた。

その刹那、窓ガラスが割れ、銃弾が舞う。

何百発もの口径もバラバラな弾丸が光の線となって、部屋の中へと入る。

僕は腰にさしていたブローニングを手に取り構え、中腰でガラスの欠片が飛び散る、窓際まで走った。

今、撃ち出されている銃弾には、けん制と敵が侵入しやすくするための、入り口を作る意味しかない。



弾を撃っている相手も、これで僕らが死んでくると、思っているわけじゃない。

それに、本当に僕達を殺したいのなら事務所に爆弾をしかけるか、ミサイルランチャーを打ち込むのが手っ取り早い。

僕たちを襲っている敵は、誰が誰だかわからない死体がほしいわけではない、ということだけは確かだった。

僕はヒリヒリとした戦場の空気を肌を感じながら、野球選手がするスライディングのように腰を低くしたまま窓の下へと身体をもぐりこませた。

そうそうにバルメとレヴィはケンカを辞め、グロツクのスライドを引いて、ココの腕を引き、ソファアーの影に身を隠す。

トージョはココの無事を改めて確認すると、僕とバルメに手で合図をして、僕と反対側の窓際の様子を覗いて短い悲鳴を上げた。

僕もトージョにつられて、窓の外をチラリと覗く。

いつの間にか集まった三十人を超える男たちが住を片手に、鼻息も荒く、いきり立っているのが見えた。

銃弾の嵐が止み、次に男達の「いくぞ」「殺すぞ」の大合唱が始まった。

まるで男達はお行儀の悪い三才児のように、声を荒げながら、つばを吐き、酒を飲み戦意を高めている。

「こうなると思つてたぜ」とレヴィは一人、楽しそうに雄叫びを上げ、腰にぶら下げた二丁のベレッタを引き抜いた——両方の手に。

「おいおい、ここは西部劇か！」

トージョが叫ぶ。

レヴィが笑う、骸骨のように。

「お客様に、最高のガンマンショーをお見せしよう」

レヴィは役者がやるような、丁寧なお辞儀をすると、窓に梯子をかけて登ろうとしていた男に、一発。梯子を押さえていた男に、もう一発リズムカルに食らわせる。

僕とトージョはレヴィに誰かが撃つた球があたらないよう。レヴィがベレッタを撃つ、その隙を敵に狙わせないために、窓から銃だけを出して狙いを定めず撃ちまくる。

レヴィは下で銃を構える男たちに、片手で撃つているとは思えないほどの命中精度で銃弾を当てていく。

レヴィは曲芸のような身のさばきで敵の射線からよけ、僕たちめがけて飛んでくる手榴弾を神業的な反射神経で打ち落とす、僕とトージョはレヴィを援護しながら、

レヴィの技術に改めて驚いた。

レヴィの動きは僕がココに付き合わされて見た、西部劇の二丁拳銃のガンマンそのものだったからだ。

「ロック、お客さんを頼むぞ！」

ダッチが部屋に隠していたショットガンを取り出して、外の敵に向けて一発、二発と打ち込む。ロックはダッチの言葉に頷き、中腰の体制でココとバルメを階段の方へと手招きする。

「ベニーが車を用意してます、早く！」

ココがロックの後をついていく、二人を守るようにバルメが、すこし間を空けて、僕とトージョが窓際から離れ、レヴィも二丁のベレッタで弾幕を張りつつ、後ろへ下がる。「やっぱり、おいでなすったか。ですだよ姉ちゃん！」

レヴィが身体をブリッジするみたいのにのけぞる。今までレヴィの身体があつた空間に銀色の刃が月の明かりに照らされて、一瞬光つたのが見えた。

「芸がねえんだよ、シエンホア。そんなんじや、あたしを殺せないぜ？」

空を切つた刃が、突然その向きを変え再びレヴィを狙う。

「今回のワタシの狙いはオマエじゃないネ！」

レヴィはベレッタでそのカタナを受けた。

変な言い回しと、アクセントに問題がある妙な英語をしゃべる長髪のピンヒールを履

いた女が、もう一方の手からナイフ、と呼ぶには大きすぎるカタナをココに向かつて投げつける。

バルメがとつさに、それをグロツクの九ミリ弾ではじく。

グロツクに弾かれたカタナが、ピンヒールの女の手に戻る。どうやら、女が操るカタナには特殊な紐がついているようで、それを巧みに操ることで、一撃必殺の殺傷力をもった弾数無限の、投擲武器として扱っている。

「私のココはやらせません！」

バルメはピンヒール女の手にカタナが戻る前に、間合いをつめながら、グロツクの弾を打つ。けん制弾以外の何物でもない、弾丸はピンヒール女をかすめることすら出来ず、空を舞う。

バルメは銃弾を撃ち尽くして、弾装が空になったグロツクをピンヒール女に投げつけながら、腰にさしていたナイフを抜いてピンヒール女の腹を狙う。

ピンヒール女はとつさに身体の向きを変え、紙一重でそのナイフをかわし、速度が乗って一瞬身体が伸びきったバルメの首筋に、その重さを乗せたカタナを振り下ろす。バルメはナイフを突き出した速度を活かし、地面に手をつけて身体を前転させ、ピンヒール女のカタナの届く範囲から逃れた。

ピンヒール女の一撃をよけたバルメは、前転したときの勢いを踏ん張って殺し、その

反動を使つて身体をバネが弾けるように速度をつけて立ち上がり、再びピンヒール女の間に踏み込みつつ、ナイフを横に薙ぐ。

ピンヒール女は背後から襲いかかるバルメのナイフを一方のカタナで受け、もう一方のカタナをバルメの顔めがけて投げるが、バルメは身体を沈めてそれをよけ。ピンヒール女から離れて距離をとった。

二人のやり取りを見ていたレヴィは楽しげに笑いながら、ダツチとともに次々と、部屋の中に入ろうとする、敵に弾を撃ち込んでいた。

僕はピンヒールを女とバルメとの攻防を目の端に収めながら、トージョ、ロック、ココ、僕の順で階段を下る。

「これを」ロックはいつの間にか手に持っていた手榴弾をトージョに渡す。「これはこれは」とトージョは軽口を叩きながらロックから渡された手榴弾のピンを抜き、下の階へと投げ込んだ。

一瞬の間のあと、命乞いのような悲鳴と手榴弾の爆発による短い閃光が起こった。

「さあ、行きましょう」

トージョはベレッタの銃弾を狙いをつけずにところかまわず撃ちながら、敵からの反撃を防いでいる。

僕も階段を下りながら、トージョと同じように銃弾をばら撒く。

「これだから、ロアナプラは嫌！」

ココはヒステリー気味に手榴弾の破片でボロボロになった一階の家具を、ハイヒールで踏める場所を探しながら、早足で進む。

「死ねや！」ボロボロになった部屋の瓦礫の中から男が現われるも、トージョにすばやく脳みそに弾丸を打ち込まれて、うめき声を上げながら倒れた。

「まだ、他にもいるかもしれない。ココ、急ごう！」

残念なことに、トージョの予言は的中した、

手榴弾の爆発を聞いたのか、他の敵が一階にどんどんと集まってきて、銃弾の雨を降らせる。

僕たちはとっさに入り口から見えない場所にある物陰に隠れた。

とりあえず、物陰に隠れるというのは最高ではないけれど、最低限の

「ミスター・ロック。どうするんです！」

「もう少し待っててください！」

ロックが激しい銃撃のなかで頭を手で覆いながら叫ぶ。

僕とトージョは弾数が残り少なくなった銃をなるべく相手に当たるように、撃つ。

撃つは、撃つのだがこの銃撃戦の中でじつくりと敵に狙いをつけながら撃つのは、自分を殺してくれ、と言っているのと同じで、銃撃戦の中で棒立ちでマシンガン撃つて

敵を倒せるのはハリウッドスターだけだ。

一瞬間を出して、撃つ。相手の銃が見えたら隠れる。

増えていく空薬莖、減っていく九ミリ弾。

僕の準備していた最後のマガジンが切れる。

「トージョ、弾は？」

「こつちもない！」

僕もトージョも準備していた弾が無くなった。

簡単に言えば、絶体絶命の状況だ。

「もーヤダ。ディ○ニーランド行きたい」

ココが隠れている瓦礫にもたれかかりながら、遠い目をして言った。

突如、銃撃が止む――。

一瞬の間。

それは数秒だったのかも、知れないし。数十秒だったのかもしれない、あるいはコンマ何秒か。

とにかく、僕の目にはすべてがゆっくりに見えた。

目がつぶれるほどのライトの光。

悲鳴と叫び声、と壁が剥がれる「ギシギシ」という音。

地震のような衝撃で、建物全体が揺れ、僕はバランスを崩す。

そして、僕たちの目の前には平べったい顔をした、いかにも重厚そうなるいアメリカ車が壁をぶち破り、敵と瓦礫を押しつけて、激しい衝撃と共に鳴り物入りで入場してきた。

「型が違う？ つてことは……」

僕の隣のロツクの顔が青ざめるのがわかった。

「どうしたんですか、ミスター・ロツク。まさか……」

ココもロツクの様子に気づいたようで、ココの笑顔が一瞬固まった。

「あの車はベニーのじゃない！」

ロツクが叫ぶのと同時に壁を破り乗り込んできた車のドアが一斉に開かれた。



## 第五話 不戦而屈人之兵、善之善者也。

突如、事務所の壁を破壊して衝撃の登場を告げた一台のアメ車。俺の危険を感知する「直感」がひりひりとアレは敵だと告げる。

車から四人の赤い京劇に出てくるような孫悟空の面をした軍服の男たちが、ぞろぞろ突撃銃を装備して降り、銃弾の的になるであろう自分たちの身体を開け放ったドアで隠す。

俺は不意に、その赤々とした孫悟空の面に、言いようのない違和感を覚えた。

仮面の男達は俺の気などしらず、早々に銃を構え、威嚇の意味を込めた銃弾をばら撒きながら各々間隔をあげつつ、的確に僕らを取り囲もうとしている。

仮面の男達のその動きは洗練されたもので、ロアナプラのチンピラまがいの元軍人崩れの、それとは異なる動きだった。

ヨナもトージョも残りの銃弾はわずかだ。俺はもちろん銃を持たない主義だし、ココ・ヘクマティアルは武器商人のくせに銃を持っていないようだった。

「ヨナ君、下の床を剥いで！」

レヴィが持ち出していないのなら、まだそこにあるはずだ。

俺はダッチが自宅以外の武器の保管庫として、普段使っていない武器を保存している場所を知っていた。運がいいことに、それはヨナの尻の下にあった。ヨナは腰からナイフを取り出し、木と木の隙間にナイフを滑り込ませ、勢いよくひっぺがす。

しかし、ろくに整備もされていないであろう、緊急用の武器が直ぐに使えるのならないのだが……。

「四十四マグナムが一つと、AK——突撃銃。弾装に弾はたっぷり」

ヨナ君の声を聞いて、俺はひとまず安心した。

とりあえずの賭けには勝った。

もしも、敵に銃弾がなくなったことに気づかれたら最悪だ。自分たちを守る武器はなくなり、せいぜい銃弾が無くなった拳銃をなげつけるか、格闘戦に持ち込んで銃を持つ相手とやりあうか——どちらにしても銃を持った相手に丸腰でケンカを売るのは、賢いとはいいがたい。

それしか手段がないのなら、三十六計逃げるにしかず、である。  
確実に俺の寿命は数分伸びた。

いや、数秒かもしれないが。

トージョの拳銃のスライドが開く、銀色の銃身がむきだしになり、ほのかに赤みを帯びているように見えた。

「トージョ、これを一！」

ちょうど銃弾を撃ち終わったトージョにヨナがAK四十七を投げ渡す。トージョはそれを手に取ると、手早く銃弾を装填させ、AKを横に薙ぐ。

銃弾が家具だったものに食い込み、血しぶきのように木片を飛ばす。

ヨナがマグナムを一発、二発と撃つが子供の手には四十四口径の銃弾の威力を殺しきれず、ひっくり返りそうなのを必死で堪えている。

仮面の男達はこちらの射撃の腕に怖気づいたのか、勢いのあつた銃撃に間ができた。

俺たちはその間につけいるように、中腰の姿勢ですばやく入り口へと瓦礫に隠れながら進んでいく。

仮面の男達もこちらの動きに気づいたのか、フルオートではなく、セミオートで小刻みに銃弾を節約しながら、ココ・ヘクマティアルがいるであろう場所に銃弾を集中させる。

彼らの狙いはどうやらココ・ヘクマティアルらしい。

俺は自分以外に向けられている殺気のわけをわかつた気がした。

今、俺に確実に言えることは一つ。今回の襲撃の理由はやはり、ココ・ヘクマティアルが原因だということだ。

確かに、俺たちラグーン商會を狙うならわざわざわざわざ事務所に押し入る必要はないし。そもそもこのタイミングで襲う必要はあまりない。

もし、このタイミングでわざと襲ったのだとしたら、アリバイ工作以外の何物でもないが、この犯罪都市ロアナプラで縄張り争いのためのアリバイ工作をする意味はほとんどない。それに、基本的には中立に位置する俺たちを狙う勢力がいる、というのも考えにくい。

まあ、色々なところから恨みを買っているのは知っている。それも、利子をつけたらきりがない青天井だということも。

しかし、少ない可能性を考えると、ありえなくはないのが俺たちのポストを狙う新興勢力の運び屋か。だがそれといったやつらが動き回っている、という話も聞いたことがない。

第一、そんなやからがうろついていたらバラライカ辺りから忠告がくるだろうし、そこまでダッチャー——ベニーは追いとくとしても、レヴィの勘が鈍っているとは思えない

かった。

様々な選択肢を除外して、残された可能性から導きだされる答えはココ・ヘクマティアルを狙う殺し屋か、政府機関か。

どちらにしても、俺たちは巻き込まれた、ということになる。

その分、代金はずめばいいのだが……。

そんなことを考えていた俺の目の前に銃弾が飛び、俺の意識が現実へと引き戻される。

「ミス・ヘクマティアル！ 船にいるあなたの部下と連絡は？」

「私が仲間を呼んでいる間に死んでしまうとと思いませんか！」

ココ・ヘクマティアルの怒鳴り声に年相応な女性の顔を感じた俺は、思わず吹き出してしまった。

なんだ、普通の女の子の顔もあるんだ、と。

「ミスター・ロック。笑っている状況ではありません！」

「こんな状況、笑うしかないでしょ」

俺はそう言うってから、緩んだ顔の筋肉を引き締める。

硝煙の煙と拳銃の嵐の中。俺は自分の頭がドライアイスのような、冷たさと、触れれ

ば火傷するような熱が支配するのがわかった。

自分の中の、意識しない自分。

破壊と暴力と、金と汚職と、不正義と犯罪と、絶望と希望と。

知らぬ間に現われる利己的な自分。他人の命を賭け、コールすることになれてしまった口アナプラの住人——。

今まで賭けられた命。その天井知らずの賭け金に見合うだけの報酬はあるのか。

不意に銃声が止んだ。

仮面の男たちの意識が俺たちからされる。

何かがあったのだ、何かが。

その何かを銃撃から身を隠す俺たちにはわからないのはまずい。

状況の変化にいち早く気づかなければ——。

俺が隠れている瓦礫から顔を覗かせようとした、そのとき。

「伏せて！」

ヨナが叫ぶのと同時に、瞼をとじていても、眼がつぶれしまいそんな強い光と、鼓膜を破らん限りの爆音が背後から轟く。

キーンという耳鳴りに近い音が耳の中に充満し、一切の外音を遮断されたようだ。

俺の見える光景はまるで、無声映画のように音のない、臨場感に欠けるものだった。

しかし、それでも一撃必殺の銃弾は飛び交っている。

「スタングレネードか」俺は誰に言うでもなくつぶやいた。もちろん、そんな自分の声も聞こえはしなかったが。

タングレネードとは大音響とすさまじいほどの閃光によつて、敵を一時的に無力化させるための武器だ。スタングレネード自体に殺傷能力はないが、敵を一時的に無力化することができる、ということ。特殊部隊が人質救出の際に使われるらしい。ということ。レヴィが言っていたのを俺は思い出した。

ならばスタングレネードを投げ込んだのは誰だ――。

俺は銃弾で穴が開いた瓦礫の隙間からこつそりと様子を伺う。

無声映画のように音の無い目の前の光景は場感と現実味に欠けている。

しかし、そこを飛び交う一撃必殺の銃弾はあいも変わらず飛び交ってはいるが、その向きが変わっていた。

仮面の男たちの銃口の向きが俺たちから、新たな敵へと。

仮面をつけた男たちの、側面から叩き込まれる銃弾は効果的だったらしく四人いた仮面の男たちの数が、一人、二人と減っていく。

さらにそこに、ヨナ、トージョの援護射撃が加わり。仮面の男たちは十字砲火を浴び

て今までの勢いをそがれていく。

三人目が肩に銃弾を受け、のけぞり。それに動揺した四人目も脳天に銃弾を打ち込まれその場に崩れ落ちた。

まだ俺は耳鳴りがして、誰が何をやっているのかわからない状況ではあったが、新しく現われた敵が銃撃をしてこないことを素直に考えると、俺たちにとつて敵ではない、ということが判明した。

敵の敵は味方か――。

このタイミングで現われた、ということとはココ・ヘクマティアルの取引に関係する人間なのかも知れない――そんなことを頭の片隅で考えながら俺は瓦礫からゆつくりと頭を出す。

徐々に耳鳴りが収まってくる。まだまだはつきりと音は聞こえないがぼんやりと俺の頭は状況を理解し始めた。

ココ・ヘクマティアルも隠れていた瓦礫から姿をあらわす。ヨナとトージョは五体満



足なココ・ヘクマティアルの姿に安心したのか、若干緩んだ顔をして、ココ・ヘクマティアルの元へと早足で向かう。

俺は俺と同様にまだよく耳が聞こえていないであろう、ココ・ヘクマティアルに対し指を外を指し、早く出ようと急かすようなジェスチャーをした。

ココ・ヘクマティアルもそれに同意するかのようによく頷く。

ヨナ、トージョが銃を構え、周りを見回しながら先を歩く。俺とココ・ヘクマティアルはそれを見届けてからヨナとトージョの合図を確認してから外へ出た。

元事務所であり、倉庫でもあった一階はその骨格だけを残し、見事に瓦礫の山と化していた。

俺はその姿をみて「またか」とため息を吐いた。

ココ・ヘクマティアルは落ち込んでいる俺に一瞥くると、なんとも例え難い顔をしながらかつた。俺は彼女に「いつものことですよ」と苦笑いで返す。また、彼女は複雑な顔をして笑っていた。

「えーところでミスター・ロック」

若干、聞こえずらい彼女の声に俺は耳を傾ける。

「あの方はあなたのお知り合いですか？」

ココ・ヘクマティアルの指差す先には、女性用のビジネススーツに身をつつんだ

ショートカットの女性が『敵意はない』と言わんばかりに突撃銃のトリガーガードに指を引つ掛けてホールドアップしたまま俺たちに笑いかけていた。

「はじめまして、ミス・ココ・ヘクマティアル。私の名前は虎（フー）、今回の武器の取引をする予定だったものです」

フーと名乗った女性は突撃銃を肩にかけ、ココ・ヘクマティアルに握手を求めた。

「これは、お初にお目にかかります。フーさん——」

ココ・ヘクマティアルの言葉を遮り「とりあえず、ここを離れるのが先決です」と彼女を自分が乗っていた車へと誘導する。

「私の部下も一緒に緒して、よろしいでしょうか？」

ココ・ヘクマティアルは再びニコニコとした笑顔を顔に貼り付けて言う。フーも「もちろん」と笑顔で返した。

「おうおう、ずいぶんとめちやくちやにしてくれたぜ」

「こりゃあ、また修理しないとなあ。ダッチ」

「もしかして、いつもこんな調子なんですか？」

きき慣れた声に俺は振り返る、そこには一階の瓦礫を蹴り飛ばしながらこちらへ向う

ダッチとレヴィ。それからココ・ヘクマティアルの私兵のバルメの姿があった。

「無事で安心しました」とココ・ヘクマティアルはバルメの姿と、ついでの二人を見て胸をなでおろしたように見えた。

ところどころ擦り傷を負ったダッチと無傷のレヴィ。そして、頬と腕に深めの切り傷を負った以外は元氣そうなバルメを見て俺は少し驚いた。

近接戦闘ではロアナプラでも一、二を争うシエンホア相手に片目でありながら、まとも遣り合つて無事で済んだ彼女の腕はかなりのものだと感じた。

「で、そのスーツ女は何者だ？」

レヴィが目つきの悪い目を細めて、フーにガンを飛ばす。

ダッチはレヴィに同意したといわんばかりに、ショットガンのトリガーに指をかけた。

「ココ、どうやらばやばやしているヒマはないようですよ……」

バルメの視線の先、数メートルには黒塗りの車のボンネットに、京劇の役者が被る髭の生えた派手な関羽の仮面をつけ、柄の長い槍の先端に青龍刀をつけた男がこちらに向かっているのが見えた。

「おいおい、嘘だろ……」

トージョは関羽の姿をみて口をあんどぐりとさせている。

トージョが驚くのも無理は無い。さつきは西部劇で、次は銃撃戦。そして今度は京劇。

今回ばかりはロアナプラでの生活に慣れた俺でもさすがに驚いた。

「俺はここに残る。二人はココを守れ！」

トージョは膝をついて迫りくる関羽が乗った車のタイヤに銃弾を狙うが、火花を散らすばかりでタイヤに銃弾がめり込む様子はない。ノーパンクタイヤを装備しているとなれば車自体も強化されているのは確実だ。となると銃口の小さい銃弾だけで迫る車を停めるのは不可能に近い。

「ココ・ヘクマティアル急いで！」

フーは髭をたなびかせる関羽に突撃銃で銃弾を打ち込みながら、ココ・ヘクマティアルを強引に車の中に押し込む。それにあわせるようにバルメ、ヨナが銃口を関羽に向けて銃弾を打ち込みながら、車に乗り込んだ。

「そこあなた」俺は運転席に乗り込んだフーに呼ばれ振り返る。

「三合会のホテルまで運転して」

フーの言う運転できるか、という意味はそのままの意味ではなく、なるべく正規のルートから外れたルートで地元の俺が後ろの車を撒けという意味だ。俺は後ろからレ

ヴィに「さっさと行け」とけしかけられ、しぶしぶ運転席に座ることにした。

「あとで三合会のホテルに！」

俺はレヴィたちにそう叫ぶとアクセルを思い切り吹かし、車を走らせる。

急な加速に俺は思わず後ろにのけぞりそうになるが、それを堪えてギアを変え、さらにアクセルを踏む。

しかし、俺が乗る車が最速のギアに入る前に、直ぐ後ろに関羽が乗った黒塗りの車がどんどんと迫ってきていた。

助手席のフーが黒塗りの車に銃弾を放つが、一瞬赤い火花を咲かすだけで車の運転を止める力はないようだ。

後ろの車との距離がどんどんとつまる。その距離は数十センチまで縮まった。

俺はルームミラーから関羽の仮面をつけた男が荒れた路面を走る黒い車の上に起用にたちがあると、一瞬身体を屈めて消えるのを見た。

俺たちが乗る車に『ズシン』という重量が加わる感覚と屋根がへこむ。

「嘘でしょー！」

ココ・ヘクマティアルが叫ぶのと同時に長い刃が俺の顔の横をかすめた。

関羽の仮面をつけた男が俺たちの車の屋根に飛び乗ったのだ。

それこそ、三国志最強の男。関羽が馬から馬へと飛び乗り、敵をなぎ倒すように。

さらに車の屋根がゆれる。

ヨナとバルメは銃弾を屋根へと放つが関羽はその銃弾が飛び交う範囲から逃れつつ、刃を突き刺す。柄の長い青龍刀は屋根をやすやすと貫通し、車のソファアを軽々とえぐる。バルメとヨナ、ココ・ヘクマティアルは車の壁に張り付きなんとかその刃から逃れたが、そう何度もできることではない。

まるで俺が子供のころに日本で遊んでいたナイフをさしたら人形が飛び出す玩具のように、このままつづけば誰かに刃が突き刺さることになる。

俺はハンドルを右に左に、揺らしながら屋根の上で青龍刀を突き刺す男を振り落とそうとするが、男は青龍刀をさらに深く突き刺し、柄の部分につかまっているのか一向に落ちる気配を見せない。

しかも、後ろから俺たちを追っていた車が俺たちの車のリアバンパーに車をぶつける。

俺は後ろからの激しい衝撃でハンドルに顔面を撃ちつけた。

「共産党の犬が！」

フーは銃弾を屋根に向かって撃ちながら恨めしそうに叫んだ。

俺はさらにアクセルを限界まで踏み込む。

車のメーターはもうすぐ百キロを越えそうだ。

俺はアクセルから足をはなし、ギアをバックにいれブレーキを踏みつつ、ハンドルを右に限界までできる。俺が乗る車は車体の右部分をぶつけ、車体を家の壁に擦りつけながら方向転換をする。

急な制動と遠心力で上についていた関羽の仮面をつけた男は青龍刀を突き刺したまま、車から転げ落ちたのがサイドミラーから見えた。

後ろから追っていた車も、その男を引きそうになり、慌てて急停止したのが見えた。

「な、なんとかなりましたね……」

俺はルームミラーで後ろの車が追ってこないのを確認すると、ネクタイを緩めながら車のアクセルを踏み込み三合会の経営するホテルへと急ぐ。

「なかなかの腕ですね、ミスター・ロック」

ココ・ヘクマティアルはきれいだった銀髪をぼさぼさにしたまま、安堵のため息を吐いた。

「とりあえず、コレ抜かない？」

ヨナが突き刺さったままになった青龍刀を見上げながら誰にともなく言った。

## 第六話 暗中活動

本当に厄介なものを連れて来てくれた。

きつと今の私なら、罠にかかった手負いの獣を眺めるような目で、ロアナプラの港に停泊しているH C L I社の輸送船を眺めるだろう。

私、イデイス・ブラックウオーター——。

いや、今はロアナプラでの名前を使おう。アタシは通称、暴力教会で働くシスターエダ。

我がリッポフ教会——暴力教会は一応、バチカンにも登録されている表向きは立派な教会だ。

アタシはシスターエランダの下で神の教えに従いながら、教会の中でも数少ない武器の布教活動も行っている。

というのは表向きの私の顔——。

アタシの裏の顔はアメリカの諜報機関、C I Aの工作員だ。



アタシは暴力教会のシスターエダとしてロアナプラで武器商人を装い。

私はCIAの作業員としてアメリカの国益を守っている。

ロアナプラはアジアにおける犯罪者たちの吹き溜まりだ。そのためロアナプラには新鮮な悪事の情報を手に入れるのには事を欠かない。

犯罪都市ロアナプラに集まる人間は犯罪者だけではない。犯罪者のフリをした他国の作業員やテロリストなどがテロや犯罪シンジケートの情報を探るためにロアナプラで潜伏しているものも多く。また、作業員自体もロアナプラで密輸や麻薬取引などをして資金を得るための隠れ蓑としてロアナプラで、犯罪者のフリをするものもいる。

そんな彼らの動向を調べるだけで、決してアメリカ本国では決して手に入れることが出来ない情報を、簡単に入手することができるからだ。

鮮度の高い情報はそれだけで価値がある。

一分でも情報が遅ければ、それだけで数千の兵が死ぬこともある。

大規模なテロを防げず、何百という民間人の死人をだすこともある。

我々、CIAはそういった事態を未然に防ぐために各地に作業員を潜りこませ、世界各国から情報を収集している。

麻薬組織の情報、テロ組織の情報、犯罪者の情報、犯罪組織に誤った情報を提供する、重要な犯罪者を裏で消す――。

情報を制するものは世界を制す。

ロアナプラで行われる犯罪者たちの動向や、テロリストなどの情報。時には暗殺を行いアメリカ本国へ利益を誘導する。それが私の真の仕事だ。

しかし、今回は本当に厄介なものがロアナプラに来てしまった。

私は、中国国内の革命派組織である『開放革命軍』がHCL社と武器の取引をロアナプラ海域で行う、ということを知っていた。

この開放革命軍というのは、現在の腐敗しきった中国共産党から真に人民を解放すべく、現政府と戦う、という現共産党を妥当するために作られた組織である。

私はなかなか皮肉の聞いたこのネーミングセンスを気に入っていた。

本来ならば人民を守るはずであった中国人民解放軍からも、人民を開放するという意味でつけられた意味らしく、虐げられた人間たちの憎しみと、中国国内の矛盾に満ちた状況をうまく表現しているな、と私はひそかに気に入っていた。

そんな彼らは、西側諸国ではなくロシアやイスラム圏の組織をスポンサーとし力を着々とつけて行き、今では中国国内で「軍」と呼べる人間と装備をそろえた数少ない組織となっていた。

個人の心情的には彼らを応援したい、という気持ちも理解はできなくもない。

実際、アメリカ本国としても中国が行っている本国へのスパイ行動や政府公認の犯罪

活動には手を焼かされているし。国民感情からも国内の仕事をその低価格な為替を理由に奪い。また、少数民族への弾圧やキリスト教徒を含む宗教の不自由は資本主義と自由主義をよしとする本国との姿勢とはまったく正反対なものだからだ。

私は開放革命軍の武器の取引の情報を得た時点で上司に指示を仰いだ。

そして、私の所属している組織の意向としては、可能な限りCIAの介入を匂わせずそれを妨害せよ、というものだった。

理由としては至極簡単なもので、いつかは勝手に崩壊してくれる今やアメリカの大きなお客様である中国が現段階で倒れるのは惜しい、ということ。

それから、将来革命が成功したとしても、アメリカの意向を汲まない反米政権が発足されてはやっかいだ、ということだった。

私は上司の命令に黙って従う――。

なぜならそれが我々工作人員の仕事だからだ。

仕事に私情は含まない、あくまで国のために働く。

それがスパイというものだ――。

私は秘密裏にロアナプラの香港系マフィア「三合会」に所属している人民解放軍のスパイにその情報を流していた。

私の正体がばれぬよう、巧妙に。

そして、彼らの準備が整った、というときにトラブルが起こった。

我が主の思召し、というものはなかなか複雑らしく。結局私が流した情報は私が意図した通りには行かないようだった。

H C L I 社——ココ・ヘクマティアルが乗っていた船は偶然の事故を起こし予定の航路を変え、船の修理のために何の因果かロアナプラへと停泊することとなったのだ。

これは好機でもあるし、最悪の事態でもあった。

もし、この機会を活かしF B Iのブラックリストにも名前が載っているココ・ヘクマティアルを暗殺することができたなら、世界に与える影響は少なくない。

今ここで、ココ・ヘクマティアルを殺すことができるならヨーロッパとアフリカでの武器の取引は大きく混乱するだろうし。それに付随してテロリストに流れる武器の質も大きく変わる。

しかし、ここでココ・ヘクマティアルの暗殺が成功してしまえば、中国が〈国営〉で行う武器の輸出産業はココ・ヘクマティアルという障害がなくなることで、よりスムーズにアフリカの混沌を招き、中国の国益を増すことになるだろう。

そうなると、アメリカの国益を大きく損ねる結果になるかも知れない。

だが、平和を愛する我が国としてもこれ以上、アメリカに無許可で戦場を広げてもらうのは面白くない。

命を天秤にかけられることで、世界の有様を大きく変えてしまう人物というのは多くない。少なくともこのロアナプラにはいない人間だ。

そして、上層部はココ・ヘクマティアルの暗殺を決定した。

私が再び人民解放軍のスパイに流した情報によつて、三合会のスパイはラグーン商会にいるココ・ヘクマティアルを襲撃した。

しかし、残念なことに彼らの襲撃は失敗に終わった。

彼らはラグーン商会のレヴィとココ・ヘクマティアルの私兵に阻まれ、その命を散らす結果となったのだ。

三合会に所属していた彼らはその正体は無様に死体としてさらすことになったと、すでに街の噂になっている。

さすがは「死の商人」だ、と私は思った。

死を招く商品を売るだけでなく、自らも死をばら撒くのだから。

そんなことを考えながら、私は真つ暗になった教会の中で一人、タバコに火をつける。

シスター帽を取り、自分の長い金髪を下ろしながら、タバコの煙を肺に入れた。

不意に私の携帯の着信音が、教会内に鳴り響く。

私はタバコの煙を吐き出してから、その電話にでた。

「やあ、始めましてエダくん。いや、今はイデイス・ブラックウオータと呼ぶべきかな？」

私は聞き覚えの名の無いその声に戸惑った。

電話口からは野太い男の笑い声が無遠慮に響く。

「なぜ、この番号を知っている。貴様は何者だ？」

私は低く唸る。

私の素性を知る人間はCIA内部でも少ない。もちろん、このロアナプラではシスターヨランダ以外は私のもう一つの名も、その存在を知る人間はいないはずだ。

「私の名前はいろいろある。ブックマン、アディーブ、ブラッティナイオ。好きな名前を呼ぶといい」

「あなたがブックマンですか。NCSのお偉いさんがただの作業員である私に直接電話されるとは意外です」

ブックマンがなぜ——？

CIA本部のヨーロッパ部門の課長である、本名ジョージ・ブラック。人形を操る人

形氏のように人を言葉巧みに操ることからブラッティナイオ（人形遣い）とも呼ばれる彼の名は私も聞いたことがあった。というか、有名だった。

しかし、本部で作戦指揮をとるデスクワークのお偉いさんがなぜ現場仕事をする、しかも別の部署である私に電話をよこしたのか。関係があるとするならばココ・ヘクマティアルの暗殺か――。

私は顔をしかめた。嫌な予感がしたからだ。

「なぜ、私が君に電話したのか理解に苦しんでいるようだね……」

「ええ、まったく検討がつきません」

私は皮肉を込めて言った。

同じCIAといっても部署が違えば考え方も違う。もちろん共通しているのはアメリカ本国への忠誠だけだ。

思想も、思考も違う相手は一步間違えばこちらの敵ともなる、たとえ同じCIA内部だとしてもお互いの意思の相違の結果で秘密裏に殺し合いになることも、無くはない。

「話は簡単だ。ココ・ヘクマティアルの取引の邪魔をするな」

ブックマンの声色が変わる。

やはりココ・ヘクマティアルか。

私は残り少なくなったタバコの煙を肺に入れる。

「君が今やろうとしていることは、私の計画の邪魔だ。ココ・ヘクマティアルに手を出すことは許さん」

「許さん……？」 私は自分の眉間にシワがよるのがわかった。

ほとんど灰になったタバコをハイヒールで踏み消すと、新しいタバコに火をつけた。

「何様のつもりだ、貴様。第一貴様と私の部署は関係ないはずだ！」

私の怒号が教会中に響く。

「君には悪いが、すでに君の上司には了解をとっている。それにそれぐらいの貸しは君たちの部署にはいくらでもある」

思わず私は怒りで唾えていたタバコを噛み千切りそうになった。

いくら縦割り構造のCIAであったとしても、自分が労力をかけて進めていた計画を電話一本でおじやんにされるのは気に入らない。

しかも、私の標的とする相手が大物でその喉下にナイフを突き立てられる距離にいるのに、永遠にお預けを食らわせられるのは、屈辱以外の何物でもない。

「君の返答しただが。邪魔をするというのであれば君の上司は少々めんどうなことになる。もちろん君も」

「それで脅しているつもりか！」

私は叫んだ。



「どう思おうと君の勝手だ。しかし、これもアメリカのためであり、世界のためだ」  
「世界の……?」

何を言っているのだ、この男は。

「私はただアメリカの国益のためにだけ動いているのではないのだよ。世界のためにはココ・ヘクマティアルを利用する必要がある——と言っても君はわからないかもしれないが」

「アンダーシャフト……?」

自分でもなぜその言葉が出たのかわからなかった。

しかし、ブックマンと繋がる言葉はそれだけだと思った。

「私の計画もずいぶんと有名になったものだ……」

電話の向こうでブックマンが笑ったのがわかった。

できることなら、今すぐその横面に一撃お見舞いしてやりたい、そう私は思った。

「武器商人を本気で鹵獲できると?」

私は皮肉な笑みを電話口のブックマンにもわかるように言った。

「ああ、現にココ・ヘクマティアルとは現在良好な関係が続いている」

ブックマンが「良好」の部分に力を入れた。

「武器商人をコントロールするのがプロジェクト・アンダーシャフトでしたわね……」

私は記憶の片隅にあるブックマンとアンダーシャフトという言葉結びつける。

噂に聞いたことがあった。ジョージ・ブラックが武器商人を子飼いにしようとしていると。

その作戦の名は確かアンダーシャフトと言う名前だったことだけは覚えていた。

しかし、その全容を知るものは私の知り合いにはおらず、それに関係ないことだと思  
い、私はその作戦に関心を持たなかった。

「ああ」とブックマンは短く笑う。

その余裕のある声に私は生理的嫌悪感を覚えた。

「私も一応、武器商人ですよ」

「確かに」私の心中を察してか、ブックマンは小さく笑う。

「なら取引と行こう」

「取引ですって?」

この男の話し方は気に入らない――。

私は声が怒りでうわづるのを感じて、わざと声を低く出す。

「君はココ・ヘクマティアルから手を引く。その代わり――」

「その代わり――?」

「君たちが命じた。ラブレス家党首暗殺のことは明日の朝刊には掲載らない」

「それでは脅しではないか！」

私は怒りを抑えられず声を荒げた。

すでにことは交渉ではなく、ブックマンから我々への恫喝へと変わりつつあった。

南米十三家の一つ、ラブレス家の当時の党首の暗殺を命令し、南米の社会主義運動の妨害をしたことが私が所属する機関の妨害工作ということがわかれば、世界的にアメリカの立場が危うくなる。

しかも、それが何者かによつてマスコミにリークされたとなれば、私が所属する機関の情報漏えいということになり、私の上司の首が飛ぶだけではすまなくなる。

最悪の場合、私が所属する機関はCIA内部で潰されることになりかねない。

「CIA全体に汚名を着せる気か。貴様は！」

私はブックマンがそれほどまでにココ・ヘクマティアルに入れ込む理由を考える。

たかが一人の武器商人の命がCIAの名誉を傷つけることよりも優先される——という事がどうしても私には理解ができない。

そうまでしてココ・ヘクマティアルを守る理由は何だ？

「どうだい、答えは決まったかな？」

先ほどまでと変わらぬ声色でブックマンは言う。

「どうしてそこまでココ・ヘクマティアルにこだわるのでしょうか？」

ブックマンは私の質問を鼻で笑い「君が知る必要はないことだ」と冷たく言い放った。「私はいくらでも妥協をしているのだよ。開放革命軍のことについては、そちらの好きにするといい。しかし、ココ・ヘクマティアルに手を出すことだけは許さん」

私は怒りで震えている自分の身体を抱きしめる。

この場にブックマンがいれば、その脳天に銃弾を打ち込んでやるのに――。

私はブックマンにわからぬよう、唇を噛んだ。

「さあ、どうする――?」

ブックマンは平然と私に答えを求める。

私がなんと返事をするのか分かっていくくせに!

「すでに私の上司にも了解を得ているのですよね?」

私は唇から流れ出てきた血を舌で舐めとる。

「ああ、君に連絡したのは念のためさ」

こうなることは分かっていた、といわんばかりのブックマンの態度に私は「嫌な男だ」という言葉を飲み込んで「分かりました」と返事をした。

「ほどなくして、君の上司からも知らせがくるだろう。そのときは、まあよろしく頼むよ」

ピザの注文を終えたかのように、最後まで飄々とした物言いをして、ブックマンは電

話を切った。

私は「ツーツー」という電話が切れた音を聞きながら、怒りで沸騰した頭をどうやって冷やそうかと考えていた。

「イエローフラッグにでも飲みに行くか……」

私がアタシに戻る——。

アタシは重苦しい修道服を脱ぎ捨てながら、裸になつていく。

肌に触れる夜風が怒りで火照つた身体を慰めてくれる。

気に食わない男だ——。

アタシは教会の中を裸で歩きながら自分の部屋へと向かう。

レヴィにあつたらロックとの事を散々からかつてから酒をおごらせよう。そう心の中ですぶやいた。

今夜のことはバカルデイでも飲んで忘れてしまおう——。

私が入社から作戦の中止を直接言い渡されたのは、イエローフラッグで大金が入つてかご機嫌だったレヴィにたらくバカルデイをストレートでおごらせた数時間後のこ

と  
だ  
っ  
た。  
。

## 第七話 不求同年同月同日生 但願同年同月同日死

血と硝煙の匂い。幾度と無く戦場に赴き、その度に洗い流すその臭いは私の身体にしっかりと染み付いてしまつて取れない。

その臭いに私は嫌悪感を抱きながらも、女としての幸せな人生を歩めずにいる自分をなじりたい気分だった。

こんなときに王がいたら――。

私は自分で自分の身体を抱きしめながら、そんなことを考えている【女】の自分を笑つた。

男の身体を求める、という自分が女であるという証拠に「虎」と名づけられた私は未だに慣れないでいたからだ。

私が幼いころから、私の身体は弄ばれるだけの存在で。自分に与えられた性を楽しむということとは最近まで苦手だった。

頭からお湯というより熱湯に近いシャワーを浴びながら私は、シャワールームでうづくまつていた。戦闘で火照つてしまった身体を熱いシャワーで慰めながら、京劇の仮面を被つた男たちはどこから来たのかに思考を巡らせる。

やはり、私たちの中にスパイが紛れ込んでいる——。

私は今回のココ・ヘクマティアルを襲撃した仮面の男たちは人民解放軍がよこしたものでろう、そんな確信が私にはあった。

私が泊まっている香港アフィア【三合会】のホテルも上へ下への大騒ぎとなっていた。今回、私たちを襲撃した仮面の男たちの何人かは三合会の末端に所属していた、というのをロアナプラ三合会のボスである張から聞いたのは、つい先ほどのことだった。

私の所属する「開放革命軍」のスポンサーの一人が三合会のお偉いさんの一人であったため、今回の武器の取引のためにロアナプラに滞在することになった私たちの世話をすることを強引に決められてしまった張は、当初は私たちに協力することをめんどろに思っていたようだ。

しかし、今回のココ・ヘクマティアル襲撃で三合会内部にいた裏切り者の判明を喜んだ張は「膿を出し切るにはいい機会だ」と笑顔で私に言った。

食えない男だ——。

私は常にサングラスをかけ、本心を覆い隠す張のことをそう思った。

だが、裏切り者は三合会内部だけではない。

今回の取引が人民解放軍にばれていたのは私たちの内部にも裏切りものがいたから



だ。

私にはそれがどうしようもなく不安だった。

今回、ココ・ヘクマティアルとの武器の取引は開放革命軍にとつても大きな意味を持つている。

それは未だに義勇軍の域を出ない我々が、軍としての確かな兵装を持ち。他の革命ゲリラから脱却することに繋がるからだ。

大きな軍事力は大きな政治力を持つ。

我々が今回の取引で得た武装により、一つの少数民族自治区を開放する、それが我々の第一の目的だ。

一つの自治区を人民の手に開放することにより、我々は強い政治力を持つて中央政府との本格的な交渉の地盤を作る。もちろん、我々の交渉に中央政府が乗ってくることはないだろう。

しかし、真の目的はそれを大々的なニュースにすることだ。

中央政府は我々を恐れるあまり、交渉すらできない、と。

その結果、中国全土でくすぶり続ける革命の火は我々の決起により、より強い炎とな

り中央政府打倒へと一気に加速するだろう。

そのための足がかりとして、ココ・ヘクマティアルが我々にもたらす豊富な武器は絶對に必要なのだ。

武器は人を魅了する――。

たった一丁のカラシニコフですら武器を持たぬものからすれば十分な脅威となる。それが十丁、百丁、千丁、となれば人の心はたやすく動く。

武器が人民の心を変えるのだ。

ココ・ヘクマティアルとの取引で得る大量の銃器は我々の同士を加速度的に増やし、計画を推し進める巨大なうねりへと変わるだろう。

そして、その力があれば汚職で腐りきり、士気も低く弱いものにしか力を振るえない人民解放軍を打ち倒すことも可能になる――。

そのためにも、今回の取引に失敗は許されない。

私は不安と怒りで震える自分の身体をさらに強く抱きしめた。

いつも王が私にしてくれるように。

すでに取引の情報は人民解放軍に漏れてしまった——ということとは変えようの無い事実だ。

今まで秘密裏に進めてきた計画が、たった一回の失敗で水の泡となる。なんとしてもそれだけは避けなければならない。

しかし、現在の状況は最低でこそあるが、最悪ではない。

ココ・ヘクマティアルの船がロアナプラの港に停泊することは、我々も予測はしていなかった。

「今ならまだ巻き返せる」

私は自分の言葉を嘸み締める。

予想だにしないトラブルというのは、失敗できないときにこそ起きる。

これは私の経験則だった。

普段から偵察を行い、入念に準備をいざ実行に——という時に限って思わぬトラブルが起こる。運命の見えない力、とでも言うような不可解な力が働く、ということを私は戦争の中で何度かあった。

その日に限って、ターゲットが来ない。

その時に限って、味方が負傷する。

その場に限って、人が死ぬ。

普段なら有り得ないということが、何故か起こる。

そういう時は、そういうものだとか割り切るしかない。

その時にトラブルが起これば作戦を変えるか、日にちを変えればすむ。しかし、その日しかない、というときには大きな代償を払う覚悟で作戦を遂行させねばならない。

結果、私は今まで何十という部下を殺してきた。

死んでいった彼らのために、今回だけは失敗は許されない。

私は視線を感じた。

いつものことだ、と思いシャワーを浴びたまま目を閉じる。

まぶたの裏に、今ままで殺した彼らの顔が次々に浮かぶ。

父、母、兄、大兄、同士。

「わかっている」私は誰に言うでもなくつぶやく。

いずれは私も、その代償を払わなければならない。しかし、それはまだ今ではない。

記憶の闇が、私を襲う――。

それは私が暗夜之虎を離れるときのことだった。

母を殺した私は暗夜之虎の隊長である大兄へ「ダーグー」と呼ばれていた劉に戦士として育てられ——いや、戦士として調教されたというのが正しい。

時には部隊の慰み物として扱われつつも、私は部隊の中で訓練をつみながら、着実にその殺戮の才能を伸ばしていった。

最初の三年間は地獄だと思った。

幼少から黒子供へ「ハイハイズ」として働かされていた私でも、毎日のように続く過酷な訓練と部隊の慰み物としての扱いは、きついものがあつた。

殴られ、蹴られ、罵られ。

その繰り返しの地獄のような日々の中ですごした三年後。本格的に戦士として戦場に出たとき、私はその才能を遺憾なく発揮した。

年齢的にはまだまだ少女にしか見えない私は、暗夜之虎の隊長であつた劉の指令により、反共産党組織にスパイとして潜り込むこととなつた。

さすがに少女にしか見えない私を人民解放軍のスパイと思うものはおらず、私の初めての潜入活動はうまくいった。

私は数ヶ月その組織の中で、革命の熱に当てられた女学生のフリをしてすごした。

彼らは私の行動にいつさいの疑いも無く受け入れ、そして私に裏切られた。

私は彼らがテロを行う前日に、秘密裏に組織のリーダーを殺し。彼らが知らぬ間に情報を劉に伝え、組織を壊滅させた。

私のはじめての任務は拍子抜けするほど簡単に終わった。

私に組織を壊滅させられた彼らは、テロを行うにはお人よし過ぎたのだ。

その日から私は暗夜之虎で「裏切りの虎」と呼ばれるようになった。

それからの私の仕事は共産党にたて突く組織に潜入し、情報を暗夜之虎に流し壊滅させることになった。

そんな私を開放革命軍の創始者である、王は変えてくれた。

誰かのために戦う喜び、正義のための戦いの充実感を彼は教えてくれた。

私が開放革命軍の王にあったのは、私が二十歳を過ぎたころだった。

私はそれまでにいくつかの反共産党組織を壊滅させていた。

私はそのときも今までの潜入任務同様、簡単にかたがつくと思っていた。

実際は私の人生を大きく変えることになったのだが……。

王は私の嘘を見破った初めての男だった。

私が彼の仲間を脅し、強引にまだ「開放革命連盟」と名乗っていたころの開放革命軍にいつものように潜入した。

しかし、私と初めて会った彼は力のこもったその目で、私が人民解放軍の一員だということを見抜いた。

そのとき私は死を覚悟した。

裏切り者の末路は決まっている、死ぬか。二重スパイになるかだ。

私は暗夜之虎に育てられた。

幸せというには程遠い日々だったが、親を殺し、故郷を捨てた私には暗夜之虎しかなかった。

私は二重スパイになることを拒絶し、殺されることを選んだ。

だが、王は私を殺さなかった。

私にはそれがとても不思議だった。

王は私に監視もつけず、誰にも私がスパイとも告げずただ彼のそばにさせた。不可解な王の行動に私は混乱した。

私の混乱すら王の策略かと思うほどに。

王は開放革命連盟の活動をしつつ、彼は私と暮らすことを強要した。

そのときの私が王に「なぜ」と聞くと彼は困ったように力のこもった目をそらして「一

目ぼれだ」とつぶやいたのを今でも私は覚えている。

王は国家転覆という激しい思想を持ちながら、それに似合わない穏やかな生活を彼は好んでいた。

当時の彼は今まで私が殺してきた反共産党組織のリーダーの誰とも違う、心に大きな志を秘めた、やさしい人物だった。

熱病にうなされるように現状にただ不満を言いながら「革命、革命！」と叫んでばかりいた他の男たちとは全く異なる人種だった。

私は王と共に暮らしながら、様々なことを彼から教えられた。

料理の作り方、映画の楽しみ方。女としての幸せ。

私はどんどんと彼に惹かれていった。

それは今まで私を感じたことが無い感覚だった。王といると、頭の中がふわふわとした綿菓子のように軽く、陰鬱とした任務の日々を忘れさせてくれた。

私は胸が苦しくなる始めての感覚を病気かと思ひ、王に相談したら「それは君も恋しているんだよ」と笑われた。

ああ、これが恋なのか――。



私は目を開けて、熱を帯びてけだるくなった身体を立ち上がらせる。

蛇口を締め、お湯を止め、水滴を身体に貼り付けたままシャワールームから出る。

シャワールームに備え付けてあったタオルを乱暴に身体に巻きつけながら、私は濡れた身体のままベットへ倒れこみ、再び目をつぶる。

私は王と数ヶ月いっしょに生活し、決意を決めた。

私は「裏切りの虎」として暗夜之虎を裏切ることには決めたのだ。

私が夜之虎を裏切るとはそう難しいことではなかった。

実は私の存在は暗夜之虎していたときも、戸籍の無いヘイハイズとして扱われていたのだ。

結局のところ私は最初から最後まで、生まれていないものとして扱われていたのだ。

私に与えられた虎へフーという名前は所詮コードネームでしかなかったことを私は暗夜之虎を裏切る前から知っていた。

それは私が部隊の長である劉を殺す大きな理由の一つになった。

私は今の裏切りの虎としての生活の先に自由な世界が待っていると、心のどこかで信じていたからだ。

だからこそ、心を無にして何人もの人を裏切り、殺し、自分を今まで生かしてきた。

しかし、結局のところ私は共産党にとつて便利なコマでしかなく、任務のたびに与えられた名前や、作られた個人情報はその場限りの偽装されたもので、実際に私に与えられた生まれてきた証拠は今までも、そしてこれからも存在しないということを知り。私の暗夜之虎への忠誠心はすでに消えていた。

その夜、私は暗夜之虎の長である劉を殺した。

「裏切りの虎が！」

それが劉が私に言い残した最後の言葉だった。

それから私は暗夜之虎から逃げるため、そして王に迷惑をかけないよう彼の側から離れ姿を隠した。

王から離れた私の心は今まで受けたどんな傷よりも、深く心をえぐった。

姿を消した私は暗夜之虎で鍛えられた能力を活かし、反共産党の組織へ潜り込み戦士として戦った。

王への気持ちを忘れるかのように、私は激しい戦いに進んで身を置いた。

血、硝煙、死体の臭い。私の身体はそれらの臭いを吸収し、その臭いを身体へと染み付かせ、私の体臭へと変えていった。

私の体臭が戦場の香りと変わらなくなるほどの月日が過ぎたころ。私が所属してい

た反共産党組織は開放革命連盟と手を結ぶことになった。

私はその話を聞いたとき王の顔が私の脳裏に浮かんだ。

ああ、私はまだ彼に恋をしているのだなと思い、顔が熱くなるのを感じた。

当時の私は彼に会いたい気持ちと、彼から逃げたい気持ちで頭がつぶされた脳しようのようにぐちゃぐちゃになっていた。

きつと正常な判断ができなかったのだろう。結局、私はその組織から抜けることができなかつた。

それは正しかったと今の私は思っている。

王は私に会うやいなや私の身体を強く、本当に強く抱きしめてくれた。

久しぶりに会った王の力強い目は変わっていないが、体つきはゴツゴツとした戦士のそれになっていた。私を抱く彼の力もまた以前よりずっと強くなっていた。

彼は今まで解放革命連盟のリーダーとしてだけでなく、現場の戦士としても戦っていたと私は聞いて驚いた。戦場とは無縁のやさしい心を持った彼が戦場に出て銃をもつ姿をどうしても私には想像できなかつたからだ。

それでも一人のリーダーとして戦場で動く彼を見たとき、私の心はざわついた。

これではいつか王は死んでしまう——。

私は彼を守るため、彼と共に戦場を駆けることを選んだ。

王といた月日はあつという間に過ぎていった。

私は自分の持てる限りのすべてを彼のために使ったし。王も私にたくさん愛情を注いでくれた。

死と隣り合わせの日々であつたけれども、私は王と過ごせることが幸せだった。

そして、彼のもつ魅力に沢山の人間と金が集まつてきた。

組織の名前も「開放革命連盟」から「開放革命軍」へと名前を変え、同士を増やし。ついに「海運の巨匠」と呼ばれるH C L I社と大規模な武器の取引を行えるまでに成長した。

まるで、三国志の劉備のようだと思った。王が世界を変えるのだ、三国志の劉備のよう。

私は密かに願う。生まれたときは違つとも死ぬときは王と同じであつて欲しい。

死ぬまで彼を守りたい、と。

私は目を覚ます――。

どうやら、私は昔のことを思い出しながら寝てしまつていたようだ。

私は壁にかかっている時計に目をやると、私がベットに入ってから十分もたっていないことに驚いた。

私は疲れているのか……。

銃弾の撃ち合いをしたばかりの私の脳内はアドレナリンという物質が多く分泌され、極度の緊張状態になった脳はそのストレスから開放されることで、居眠りしやすくなる。

私は王の言葉を思い出しながら、眠気の残ったけだるい身体を持ちあえげる。

シャワーを浴びて直ぐベットに倒れこんだときにはビシヨビシヨだった私の身体はすでに乾ききっていた。

私は自分の身体に巻きつけていたタオルをほどき、裸のまま窓辺に向かう。

カーテンを開け、窓をひらく。

ロアナプラの湿った夜の空気が私の身体を包む。

私はロアナプラの夜景を見つめながら「夜景だけは美しい」と思った。  
「寝ている場合じゃないよな……」

私は湿った髪の毛を夜風で乾かす。

不意に私の部屋に振動音が鳴り響く。

私は条件反射で身構えるが、すぐにその振動が携帯電話の着信音だと気づいて、身体

の力が抜けた。

ベットのうえで私の携帯電話が震えていた。

私は間抜けな自分の姿に苦笑いしつつ、裸のまま鳴り続ける携帯電話に手を取った。

「姐姐〈ジェイジェイ〉、俺です」

携帯電話から低い覇気のない男の声がした。私のことをジェイジェイと呼ぶのは開放革命軍の中でも、この男しかいない。

「曹、何か分かったか？」

曹は今回のココ・ヘクマティアルとの取引で唯一、私が連れてきた部下だった。私たち開放革命軍の部下の中でも、かなりの手練だ。

個人の戦闘能力では私を凌ぐほどの実力を持ち、キルゾーン（相手の間合い）に気づかれずに潜入する能力も光るものがある。私は今回の取引に対し曹をつれてきたのはロアナプラで滞在中に敵に襲われたり、私が死ぬという方が一という場合に備えてであり。彼ならば私の代わりになるという、保険だった。

そして、今回のココ・ヘクマティアルの襲撃に関して開放革命軍内部の情報を曹に探らせていた。

「隊内に動きはないそうです。王に確認を取りました」

「どういふことだ？」

私の予想が外れた——。

無意識に携帯電話を握る手に力が入る。

「しかし、俺が情報収集で忙しいからって俺を置いていくのはやめてください、心配します」

「どの口でそれを言う?」

私は曹の言葉に呆れて怒る気もしなかった。いつものことだと強引に自分を納得させる。

曹は戦士としては優秀なのだが男としては——というか『下半身』はだらしなかった。

「で、ロアナプラの女性はどうだった?」

「まあまあです。可も無く、不可も無くってところですよ」

悪びれる様子も無く、曹はつまらなそうに言った。

無口で愛想が無い割には人付き合いの「ツボ」を押さえているのか、色んな人間に好かれる傾向があり。特に女性に関しては「たった一言で女を落とす」という噂を隊内で真しやかに囁かれるほどプレイボーイだった。

隊内では彼に女性の落としかたを習いにいくものが後を絶えないとか……。

今回、そんな彼の才能を活かしロアナプラでの情報収集を任せていたときに、私はココ・ヘクマティアルがロアナプラに急遽滞在したことを知る。

そして、私がココ・ヘクマティアルの身を案じ会いに行つたときには彼女は京劇の孫悟空の仮面を被つた男たちに襲われていた――。

私は仮面の男たちを見たときに、中国共産党ならではの嫌らしい大陸的なものを感じた。

こいつらは人民解放軍からの回し者だ、私の直感がそれを告げていた。私が気づいたときには自分が乗っていた車からM16を取り出し仮面の男達に銃口を向けていた。

「しかし、さすがはジエイジエイ。いくらココ・ヘクマティアルの私兵の援護があつたとは言え、人民解放軍の奴等を退けるなんて」

「やはり、奴等は共産党の回し者か？」

曹もことの重大さに危機感を感じているのだろう。私の問いに曹は「ええ」と無駄口を叩かず短く答えた。

「女――調査の結果から分かつたことですが。ここ最近タイ周辺に中国の船の出入りが多かつたそうです」

「それで？」

「ロアナプラの売春宿は基本的には三合会とは無関係なんです、ここ半年くらい利用する中華系の人間が多くなつたらしく――」

「無駄話はいい、要件だけ話せ」



私は低いドスの利いた声を出す。

「相変わらず短気ですね」ため息混じりに曹がぼやく。

「まあ、要するに香港系の中国人じゃなく大陸系の中国人が増えてたってことです」

「今回のことは偶然だと思おうか？」

「でしようね。たまたまココ・ヘクマティアルが来たからやつちまおう、つてところらしいです」

曹は一瞬の間を置いて「中国は国家で武器商人をやっていますからね」と皮肉っぽく言った。

「大星海公司へダーシンハイコンス」か……」

「あくまで噂ですが今回の件にはCIAも絡んでいるとか、いないとか……」

私は突拍子の無い曹の言葉に「……お前、女と一緒に薬でもやったのか？」と呆れられました。

「ジェイジェイには実感ないかもしれませんが、こちらはかなり有名なんですよ……」

「それはどうも」

私は曹にそっけなく返事をした。

「で、取引はどうするんですか？」

「もちろん変える。私の勘だと、うちにも裏切りものがある——」

「裏切り者ですか？」

曹の声色が変わる。

「ああ、今回のことはたまたまじゃない」

「でも、うちの中じやそれらしい動きは無かつたんですよ？」

「裏切り者のことは私が一番知っているのさ……」

ふと私は「裏切りの虎め！」と言って死んだ劉のことを思い出す。

「ジエイジエイじゃあ、取引はどうします？」

「電話でする話じゃない、部屋に來い」

私はそう言い放つて曹との通話を一方的に切つた。

「裏切りの虎か……」

強い酒が欲しい、のどが焼けるほどの。

私は出来るなら口の中に広がる記憶という苦味を酒で消したいと願つた――。

## 第八話 群雄割拠

「ピリピリとした肌を刺す空気に俺は思わずは今いるホテルのホールから逃げ出したくなった。」

「はり詰めた空気の原因はただ一つ——。」

張率いる三合会、その最大の商売敵である『ホテルモスクワ』の女首領バラライカが部下を一人引き連れ、俺たちが泊まっている三合会のホテルに乗り込んで来たからだ。

三合会からすれば自分達の縄張りを土足で荒らされているようなものである。もしも、相手がただの下っ端であつたならば、すでにその身体は一瞬のうちに鉛弾で体重を二、三倍にされて棺おけに放り込まれていることだろう。

しかし、縄張りに踏み込んでくる相手がトップなら話は変わる。

敵対する組織の上層に位置する相手であるがこそ、その扱いを誤ればお互いに血みどろの殺し合いになる。存外に扱うのも相手がトップなら相手の部下が黙っていない。

今、三合会の配下のホテルにバラライカがいるということは、それを三合会のトップ

である張が黙認させたということだ。

お互いに面倒ごとはさげたい、という張からの無言のメッセージなのである。それをバラライカも理解しているからこそ、自分の腹心の部下を一人だけ連れ、武器を振り回すこともなくおとなしくしているのだ。

これにもココ・ヘクマティアルが絡んでいるのか——？

俺は緊張感漂うホテルのロビーで一人優雅にコーヒを飲んでるココ・ヘクマティアルに目をやった。

「さすがは武器商人だな」俺はこんな状況にも動じないココ・ヘクマティアルを眺めながら誰にも聞こえないようにつぶやいた。

そんな俺の視線に気がついたのか、ココ・ヘクマティアルが顔を上げる。不意に俺と彼女の視線が交わる。

「ロックさん！」とココ・ヘクマティアルがいたずらっ子のようにニヤリと楽しげに笑って大声で手を振りながら俺を呼んだ。

この状況でわざと俺の名前を！

「おや、ロック。あなたもここにいるとは思っていなかったわ」

メリハリのきいた女性を主張する身体を赤いスーツで包み、常に肩に軍服を引つ掛けて葉巻の煙を漂わせて闊歩する女首領、バラライカ。本来ならば、出るところは出て、引つ込むべきところは引つ込んでいるモデルのようなスタイルに目がいくのだろうが、ほとんどの人間は彼女の顔を見て震え上がるだろう。

「火傷顔（フライフェイス）」と恐れられる彼女の顔にはあだ名どおり、顔から胸にかけて拷問の後と思われる大きな火傷の跡が残っているからだ。その火傷の跡を隠すことなく堂々と振舞う彼女の姿は一人の女性というよりも、歴戦の戦士そのものだ。

元々、彼女は旧ソビエト連邦時代に第三次世界大戦で戦い抜くことを想定されて設立された部隊の隊長であり。ソビエト連邦崩壊後、ロシアマフィアとしてロアナプラでもその統率力と軍事力を背景に一大勢力として幅を利かせている組織の一つである。

彼女が率いるホテルモスクワの戦闘力は他の組織のそれを凌ぐものがあり、よほどの馬鹿でない限り、バラライカ——ホテルモスクワに手を出すものはいない。

「悪いけどロック。あちらの女性を紹介してくれないかしら？」

バラライカは俺の返事などはなからきく気などない様子でハイヒールで甲高い音を

立てながらある女性の方へと向かう。

「あなたが開放革命軍のミセス・フーか始めまして」

バラライカは驚いたことにココ・ヘクマティアルを素通りして同じフロアにいた開放革命軍のフーに手を差し出した。

「あいにくまだミス、ですの」

握手を求められたフーは一瞬、バラライカの火傷の跡に目をやって何事も無いような顔をして、求められた握手に応えた。

あの火傷跡を見てなんとも思わないのか。

俺は単身ラグーン商会へ援護に来たフーの事を改めて、侮れないと思った。

「わざわざ俺のキレイな顔を見に来たのかバラライカ？」

周りの空気が弛緩する。ホテルの奥からサングラスをかけ、首にマフラーを垂らした男——三合会の首領である張が部下を押しつけ姿を現す。

「相変わらずジョークのセンスは最悪だな、張」

バラライカは呆れたように口をへの字にまげた。

「そいつは心外だ」とバラライカの言葉に傷ついたと言わんばかりに顔をしかめて見せ

る。

「まさか、わざわざ我々のホテルに泊まりに来たわけじゃないだろう？」

「顔を見に来たのさ。張、お前じゃなくこちらのお嬢さんとあちらのお嬢さんの」

バラライカがココ・ヘクマティアルに視線を向ける。

当のココ・ヘクマティアルは「私ですか？」と素つ頓狂な声を出す。

「ええ、あなたのお父上にはずいぶんとお世話になりました。色々と」

バラライカは「色々と」の部分を強調して、何かを思い出すように目を細めた。

「それは光栄ですわ……」

ココ・ヘクマティアルはにっこりと笑ってバラライカの前に立つ。バラライカの火傷の跡に臆することなく笑顔で接する彼女に俺は「武器商人の仕事も大変なんだな」と同情した。

「武器が必要でしたらいつでもご連絡を」

ココ・ヘクマティアルが丁寧な名刺を渡す。

「それなら、カタログを送ってくださるかしら？」

バラライカが笑いながら名刺を受け取り。

「いい商品が揃ってますよ」

フーが二人に合いの手を入れた。

談笑している彼女らの姿を遠目から見れば美女三人の井戸端会議に見えるだろう。俺も光景だけなら日本で見たことがある。しかし、彼女たちの話題の商品はその容姿には似つかわしくない『武器』だ。

「ことわざに『三人寄ればかしましい』とあるがああ三人じゃ『三人寄って恐ろしい』だな」といつの間にか俺の横にいた張が笑って言う。俺は「その通りだ」と声にださず大きく頷いてみせた。

「それでは私はそろそろ帰るとしよう。軍曹、車の用意を」

バラライカは凜とした声で隣にいる部下に指示を出した。

「お早いお帰りだな、バラライカ。いい中国茶が入ったんだ、なんなら土産に持って帰るといい」

飄々とした態度で張が部下に目配せをして見せるが「結構だ」とバラライカに断られた。

バラライカの甲高いヒールの音がホテルのホールに響く。

「そうそう」バラライカが思い出したように振り向いて、フーの顔を見て言った。

「香港の奴らが信用できないなら、ミス・フーうちに来るといい。我々はお前たちなら歓迎しよう」



バラライカが車に乗り込みホテルから見えなくなると、ほぼ全員が同時にため息を吐いた。それが安堵のため息だということを俺も含めた全員が自覚したことだろう。

そんな様子を一人、タバコを吸いながら眺めていた張が「ココ・ヘクマティアルの観光案内は任せたぞ」と俺の肩を叩いてどこかへ姿を消した。

ホールに集まっていた三合会の人間も張がいなくなると自分たちの持ち場にもどつたのか、次々にいなくなつていった。

「いつもこんな調子なんですか？」

フーが俺の顔を覗きこむ。

「まあ、たまに」俺はフーにあいまいに答えた。というか、どう答えていいのか分からないかった。

バラライカがわざわざここに来た理由はおそらく、フーが所属する開放革命軍に關係することだろう。

俺はラグーン商会から三合会のホテルに向かうまでにフーが打倒中国共産党を目的とした開放革命軍の戦士だと言うことを聞いた。

彼女が女だてらに幾多の戦場を渡り歩いて来たことは、京劇の仮面を被った男たちとやりあったことから明らかだった。

「あのロシア人の火傷の女性が来られたのは私たちが原因でしよう?」

「さあ、どうでしょう」俺はフーの鋭い観察眼に舌を巻いた。きつと彼女の中ですでに回答は出ているに違いない。

わざわざ三合会のホテルにバラライカが乗り込んできたのはフーに「ロシアマフィアは敵ではない」というメッセージを伝えるため、だったのだろう。

もともと旧ソ連と中国自体の関係は良好とはいえなかった。バラライカが戦場で闊歩していた時代は冷戦の真っ只中ということもあり、欧米諸国との対立ばかりが話題になっていたが国境線を共にする旧ソ連と中国も対立していたのである。

現在、崩壊してしまったソビエト連邦に成り代わり対立していた中国がアジアでその軍事力を背景に勢力を伸ばしつつある。

ソ連軍の退役軍人やロシアスパイ「KGB」が多く所属するロシアマフィアとしては中国がデカイ顔をしているのは気に入らないのだろう。

いや、気に食わないのだ。

だからこそ、バラライカが乗り込んできた。そして、フーにメッセージを伝え、三合会に彼女の開放革命軍の邪魔立てをするなどという警告もした。

もちろん、開放革命軍はロアナプラには関るな、という意味でもあったのだろう……。

俺の考えを読んだのか、フーは俺の顔をまじまじと見ながら「ロアナプラに長居はし

「ませんよ？」と言つて俺の視界から消えた。

「やつぱりロアナプラつて噂通り物騒なところなんですネ。ミスター・ロック」

ココ・ヘクマティアルが笑いながら俺にハンカチを手渡す。

フーの次はココ・ヘクマティアルか、美人に囲まれてうれしい限りだ。涙が出そうなほどに。

俺は彼女から手渡されたハンカチに戸惑っていると「汗、すごいですよ」と俺の目を見た。

俺は自分でも気づかないうちに額に汗を浮かべていたようだった。もちろんバラライカと張のやり取りでかいた冷や汗だ。

「どういふ噂かは知りませんが。たぶんその通りだと思ひます」

ココ・ヘクマティアルに手渡されたハンカチで汗を拭いながら答えた。

「それはそうと。昨日のことがあつた後で申し訳ないのですが、お願いしたものは準備できそうですか？」

下から俺を見上げるその瞳は、整つた顔立ちも相成つて男を引き込む魅力を感じた。彼女を武器商人と知らない男ならその瞳に無条件に誘惑されてしまうことだろう。

年上のおじさまという年齢の男性であつたなら誠心誠意、貢物を彼女に渡すのかもし

れないな、と俺は密かに思った。

「ほとんど昨日の夜の時点で注文は終了しています。いくつかは分かりませんが、ほとんどお渡しした見積書通りの金額で今日の夕方にはそろおうでしょう。すでに私の同僚が動いていますし……」

「さすがです!」

ココ・ヘクマティアルはその笑みを深めて安堵のため息を吐いてから

「こんなところに埋もれさせるには惜しい人材ですよ」と嘘とも本気ともつかない口調で言った。

「光栄ですが、遠慮しておきます」

俺は顔に日本のサラリーマン時代に見につけた営業スマイルを彼女に向ける。俺は自分の心のうちに言いようの無い怒りが彼女に湧き上がってくるのを感じて戸惑う。

いや、俺は実はずっと彼女に怒りを抱いていたのだ。ただ、それを今まで我慢して勝手に過ぎない。

「今日、ヨナくんは?」

俺は知らず知らずのうちに自分の言葉に驚いた。

俺の言葉にココ・ヘクマティアルは「ええ、無事ですすよ?」と不思議そうに首をかしげる。

「この街は子供が来るようなところじゃありません」

俺は自制の聞かない自分の口に嫌気がさした。俺の心中をべらべらとしやべる己が口が未だに癒えずにいる自分の心の傷を誰彼かまわずさらけ出そうとしているのが気に食わなかった。

俺はあの子たちに同情できるほど立派な人間じゃない！

不意に俺の脳裏に「かわいそうな双子」の顔が浮かぶ――。

「この街の光景をヨナにも見せたかったです」

ココ・ヘクマティアルが小声で俺にささやいた。その言葉はまるで自分の心を吐露するように俺には思えた。

「きつと、この街はヨナが今まで見た中でも最悪でしょう」

「……」

俺は黙って彼女の言葉を聞く。

彼女のほどの財力があればヨナよりももっと優秀な兵隊を雇うことは容易なはずだ。ココ・ヘクマティアルがヨナを側に置いておく理由が俺には気になった。

なぜ豊富な資金を持つH C L I社の実子、ココ・ヘクマティアルがわざわざ少年兵を連れているのか――？

そういう『趣味』の人間もロアナプラで嫌というほど見てきた。しかし、俺は彼女が

そんな人間ではないという、確信めいたものを俺は感じていた。

「ミスター・ロック。私はヨナに色々な世界を見せてあげたいのだよ」

ココ・ヘクマティアルの口調が変わる。常に顔に貼り付けている笑みが不気味に歪んだ気がした。

「金、女、権力、薬、暴力。この街は銃弾をばら撒くだけの戦争の『穢れ』とは異なる世界だ。それこそ人間が原始のころから抑えてきた欲望を抑えきれなかった世界の結果の一つといっても過言ではない——」

ココ・ヘクマティアルが俺の顔を覗き込む。俺は彼女の瞳の奥にくすぶる黒い炎を感じて後ずさる。

「平和の国で過ごしてきたミスター・ロックなら理解していただけるかもしれない。この世は美しくなんかないと」

俺は彼女から感じる異様な空気に圧倒されて、ただ黙ることしかできない。

「私はこの世界をヨナがどう感じるかに興味があるのです」

「俺は……」

俺は何を言うべきなのだろう。

「あなたも世界に絶望したことがある——。そうでしょうミスター・ロック？」

ココ・ヘクマティアル——一体何を考えている。いや、何を企んでいる？

俺は彼女の言葉の奥に潜む思惑を一瞬、垣間見た気がした。

「私としたことがとんだ失礼なことを……」

さつとココ・ヘクマティアルの歪んだ笑みが消える。

「さつき言ったことは忘れてください」ココ・ヘクマティアルはバツが悪そうに舌を出す。周りの空気がガラリと変わる。まるで部屋の電球を古いものから新しいものに換えるぐらいに明るく華やかに。

「ココ、どうしたの？」

ヨナが心配そうな顔をしてココ・ヘクマティアルに駆け寄る。

その姿は親を慕う子供のように俺には見えた。

「では、後ほど……」

二人の姿にいたたまれなくなつて、俺は逃げるようにその場から立ち去る。

ゆっくりとした歩調が徐々に早足になつていく。

俺は今すぐ信頼しあうように寄り添う二人から離れたかった。

俺には二人の光景は神聖なもののように感じられた。ココ・ヘクマティアルの真意はともかくとして、彼女に寄り添うヨナの真心をココ・ヘクマティアルを心配する表情から読み取ることが出来た。

傭兵と雇い主の関係であるにも関わらず、二人の関係はずっと温かみのあるものよう

に俺には感じた。

しかし、俺の中のもう一人の俺は「子供を戦わせるなんて許せない」といきまいている。人の命が軽々しく扱われるロアナプラであつてもこの劣悪な環境以外の選択肢を与えられなかつた子供たちが苦しむのを俺は見たくなかつた。

それはココ・ヘクマティアルの私兵であるヨナとて、俺にとっては同じだった。



## 第九話 虚虚実実

「もーヤダ。あーデ○○ニーランド行きたい」

ココがバルメの大きな胸に顔をうずめて「疲れた〜」と何度も言いまくっている。

バルメは頬を赤く染めながら「ココ続きは二人つきりで……」とうれしそうに笑っていた。

「本当にロアナプラってところは犯罪者のデパートだよ」

トージョがげだるそうにソファーでうなだれていた。

僕たちはロアナプラから戻り、今はココの船の遊戯室にいる。

「そりゃあ、そういうところだと有名だからな……」

レームがタバコの煙を吐きながら笑った。

「海賊、香港マフィア三合会にロシアンマフィアのホテルモスクワ。コーサ・のスト等のイタリアマフィアにマニサレラカルテルのコロンビアマフィア。その他いろいろよ、いろいろ。もう、うんざり！」

ココが頭をかきむしりながら天井を見上げて、泣く真似をした。

「イタリアマフィアの連中なんか朝っぱらから武器を売ってくれて、わざわざホテル

まで忍び込んできたのよ！」

ココはバタバタと地団駄を踏みながら「非常識、非常識！」と叫ぶ。

「お嬢、こつちもこつちで昨日の夜から今日の朝まで色々な輩が俺たちの武器を狙ってきやがったんだぜ」

ルツは疲れた顔をして眠気ざましにか、苦そうな黒々としたコーヒーをすすつていた。

昼ごろ、僕とココが三合会のホテルからHCL I社の貨物船に戻ったときには血だらけになった船の甲板で皆がデッキブラシを持ちながら「あーだ、こーだ」いいながら掃除しているところだった。

ココが何があつたか質問するとワイリは「次から次に俺たちの武器を狙いやがるから皆殺しにしてやったぜ！」と親指を上げてグットポーズをして、にっこりと笑った。

そんなワイリのうれしそうな顔を見て僕とトージョは「ワイリやばい」と顔を青くした。

ワイリが言うにはチンピラともヤクザともマフィアともつかない連中が貨物船を次から次に襲撃してきたそうだ。

結果はまだ血が残る甲板が物語るように、僕たちの船を襲った連中は全員見事に返り討ちにあつたみたいだった。

「でも、本当に噂通りの場所とは思いませんでしたよ……」

「マオはロアナプラについてどんな噂を聞いていたの？」

僕はこの最悪の街が周りにどんな風に思われているのか、不思議と聞いてみたかった。

マオは東南アジア出身の軍人だったので、ロアナプラについて何か知っているだろうと思っただからだ。

「そりゃあ、ヨナくん。ロアナプラは僕の故郷でも有名さ。僕が所属していた軍隊で悪さをして退役した軍人なんかもロアナプラでどこぞのマフィアに所属してる、なんて噂もあるぐらいくでもないのが集まっていると言われていたんだよ。しかし、実際のところそれ以上とは……」

マオが遠い目をして何かを思い出しているように見えた。故郷の家族のことを思い出しているのかも知れない。

「で、うちの船の連中が船の修理に忙しいようなんだが……」

レームが外の様子を丸い窓から眺めながら言った。

「そうそう、修理がうまくいけば今日の夜にはここからオサラバできるらしい」

ココがため息を吐く。みんなも、ココにつられてため息を吐いた。僕にはそのため息にはいろいろな意味が含まれているんだな、と思った。

「しかし、バルメに手傷を負わせる奴がいるなんてな……」

ウゴが心配そうな顔をしてバルメの頬についた傷跡を指差した。

近接格闘だけで言えばこの部隊でバルメに勝てるものはいない。特に、ナイフを使った格闘術で今までバルメと同等に戦えるものはいなかった。けれども、このロアナプラでバルメと同じか、それ以上の戦闘技術を持った人間に初めて会ったのだ。

その証拠であるバルメの頬に刻まれた深い刀傷を見て、皆心の中では不安に思っている。頼れる仲間の身に危険がせまった。そして、またその相手が来るであろう予感に。

「今度あつたら返り討ちにしてやりますよ……」

バルメが口の端を上げて笑う。僕にはそのバルメの笑みに抜き身のナイフのような危うさを感じた。

バルメは昔、自分の部隊を全滅させられ、その復讐のためにそのナイフの腕を鍛えてきた過去がある。その復讐に僕も勝手に付いていったのだけれども――。

今、過去の復讐を終えたバルメにとって、今回傷を負わされたピンヒールの中国女は興味の的であることだろう。

自分の腕を試したいのだろうか――。

僕は心なしか、バルメの身体に今まで以上の活気が満ちているような気がした。

ココも心配そうな目をバルメに向けているのが分かった。

「そうそうみんな、開放革命軍との取引は今夜になったから」

脈絡も泣くココがあっけらかんと言いつつ。

僕を含めたみんながココの言葉に驚いて、あんぐりと大きく口を開けて固まっていた。

◇

赤々とした夕日が海へと沈む。

船の応急修理が終わり、僕たちの船がゆっくりと陸から離れていく。

時期に夜が来る。

僕たちは昼の間に短い仮眠を取り、ご飯を食べ、銃を整備していた。

すべては、僕たちの取引の邪魔をしに襲いに来るのであろう敵に備えて。

僕たちが武器の準備を整えている間、ラグーン商会のロックやレヴィが船の部品をもつて船の外と中を行き来していた。僕はその光景をだまって甲板から眺めていた。

ときおり部品の確認をするロックが不安そうな目をして僕のことを見つめているのが気になった。

僕たちの船が速度を上げ、その身体を大海へとその身をゆだねていく。

船が波に揺れる、僕たちはひとまず船が無事に動き出したことを確認して胸をなでおろす。

黒々とした闇がじわじわと船とロアナプラを包みこむ。

これからがロアナプラの時間だ、と言わんばかりに人口の光がその輝きを増す。ネオンの光や蛍光灯の光、屋台の光。そして、閃光――。

港から鉛弾がいくつもの光の線となって、遠のいていく僕たちの船に突き刺さる。

港に集まった沢山の人間が銃を片手に恨み言を叫びあっていた。

もちろん、十分に距離が開いたうえに特別に装甲を厚くしてある僕たちの貨物船がそう簡単に銃弾を貫通させることはない。

少なくとも、それぐらいの衝撃で再び船が動かなくなることはないと思う。

「最後まで品の無い街だった……」

ココが小さく呟く。ルツが「あいつら撃つてもいい？」とスナイパーライフルを構えながら冗談とも本気とも付かない口調で言った。

「私もルツに賛成です。ココを侮辱するなんて許せません！」バルメが鼻息も荒く何度

も頷く。

「ほら、おいでなすつたぞ」

船がどんどんとロアナプラを離れる。島の姿が小さくなると共に、巢穴から出てくる虫のように小型の船舶がぞろぞろと這い出てきた。

やっぱりだ。僕は言葉に出さなかつたが内心呆れていた。

次々に現われる小型の船舶はきつと海賊船だろう。そして、彼らの狙いは僕たち積荷とココだ。

僕たちが来たときにも同じように襲ってきた海賊たちがいたけれど、その海賊たちは全員海の藻屑と消えた。今、僕たちに襲い掛かってくる海賊船の運命もすでに決まっている。

僕は自然と銃を握る手に力が入るのを感じた。

ココを怒らせたらタダではすまない。それをここにいる皆が知っている。

ココは「本当にしつこい連中」とうんざりしたようにため息を吐いた。

「ココ、行きますか」

バルメが銃を構えてココに笑いかける。

「準備はいつでもいいぜ」

ルツ、ウゴ、ワイリがココをまつすぐ見つめた。

「それじゃあ、お仕事はじめるとしようぜ？」

マオとトージョが頷き、レームがタバコの吸殻を海に放り投げた。

「ココ」僕はココの顔を見上げる。

みんなの視線を受けたココは満足そうに大きく息を吸いこんで叫んだ――。

「全員行動開始！」

◇

俺は一人、部屋に戻りタバコを吸っていた。

無事、ココ・ヘクマティアルの仕事を終え、それなりの金を得ていた俺は同じく財布の中身が充分潤ったレヴィイから飲みを誘われたが断ってしまった。

今日はそんな気分になれなかったからだ。

俺に誘いを断られたレヴィイは目つきの悪い目をさらに悪くして、俺にガンを飛ばしてから「つまらねえ奴」と捨て台詞をはいてそそくさと一人、イエローフラッグに酒を飲みに言ってしまった。

俺にはどうしても、このまますべてが終わるとは考えられなかったからだ。

関羽の仮面の男。



フーの所属する開放革命軍。

ココ・ヘクマティアルの武器取引。

ロアナプラで暗躍する人民解放軍のスパイ。

メモ帳のようにびっしりとペンで書きなぐられた壁の文字を見ながら「ある事」を考  
えていた。

俺の部屋にはタバコの煙が充満し、灰皿には山積みになった吸殻が崩れ落ちそうに  
なっている。

そろそろ換気すべきだな……。

俺はタバコの煙で息苦しくなった部屋の窓を開け夜風を部屋に入れた。タバコの煙  
が外の新鮮な空気と入れ替わるのを肌で感じながら、俺は外から入ってきたキレイな空  
気を大きく吸い込んだ。

タバコで潤んだ肺に冷えた夜の空気が入ってくる。

何かを見落としている――。

パズルのピースは出揃った、俺にはそんな気がしていた。

しかし、まだパズルは完成してはいない。

京劇の仮面をつけた男たちがわざわざうちの事務所に押し入ってまでココ・ヘクマ

ティアルを襲ったのは偶然ではない。

そもそも、ココ・ヘクマティアルの輸送船がロアナプラに停泊することになったのは偶然だ。

その証拠に、今日の船の修理でココ・ヘクマティアルの船に細工がされていないことは明らかになった。

ということとは、三合会に人民解放軍のスパイが潜んでいたのは無関係ということになる。彼らの本来の目的は香港マフィアである三合会の監視にあつたのだろうと俺は推測している。だが、そのスパイたちは自分たちの正体が三合会にバレるのも厭わずココ・ヘクマティアルを襲撃した。

俺はそこに矛盾を感じた――。

なぜ、ココ・ヘクマティアルを殺すのは今でなければいけないのだろうか。

本来、ココ・ヘクマティアルがロアナプラ海域に来た理由はフーの所属する開放革命軍との武器の取引が目的だったはずだ。

ということとは、今回のココ・ヘクマティアルとの取引自体はかなり前から計画されていたことになる。

ならばそこから情報が漏れた可能性があるのではないか？

今回、船の偶然の事故からココ・ヘクマティアルと開放革命軍との取引は中止になった。

しかし、根本的に彼女らの計画が中止になったわけではない。

開放革命軍は偶然の事故のせいで取引の変更をする必要に迫られてはいるが、取引自体を諦めたりはしないだろう。

となると、このイレギュラーな状態で一番困るのは誰だ——？

俺は根元まで吸いきったタバコを灰皿に押し付け、新しいタバコにジツポで火をつけた。

どこまで首を突っ込めば気が済むのやら……。

俺は自分で自分を笑いたい気分だった。本当なら、すでに済んだ仕事だと思って割ってレヴィと共にイエローフラッグで酒でも飲んでいればよかったのに。

わざわざ、この件に自分から首を突っ込む必要はない。

それでも、首を突っ込まずにはいられないのは自分の性分以外の何物でもないのだから。

あるいはフーに命を助けられた恩からか。それとも子供へヨナへが絡んでいるからか。もしくはその両方か――。

すべてのことを関係ないと割り切ることができれば楽だろう、俺はいつもそういうのも思う。

あの可哀相な双子の事も、ロシアンファイアに壊滅されたヤクザの娘の事も、アメリカに運命を翻弄された幼い当主の事も、関らなければずつと楽だったのだろうか……。

俺は新しく火をつけたタバコの煙を大きく吸い込んで肺に入れた。だが、今はまだ乗りかかった船から降りる気はない。

夜風とタバコの煙で冷えた俺の頭が再び動き出す――。

ふと俺はフーの所属する開放革命軍内部にスパイがいる可能性を見落としていることに気がついた。

もしも、今回の取引事態がすでにスパイによってバレていて、ココ・ヘクマティアルとの取引に最初から罠を張られていたとしたら、と考える。

それならば三合会内部にあらかじめスパイを置くことも、最初から三合会にスパイとして潜りこんでいたものを使うことも合理的だ。

もともと、ロアナプラ付近の海域で武器の取引を行う妨害工作が目的だったとするのならば、三合会内部にいたスパイを秘密裏に利用しても何の問題もないし、三合会自体にバレる可能性も少なかった。

それがココ・ヘクマティアルの輸送船の偶然の故障により計画の変更を余儀なくされたとしたら——？

開放革命軍内部にスパイが存在することに気づかれたくない何者かが、フーの命を狙うのではなくココ・ヘクマティアルを狙うのであれば、その存在が開放革命軍にバレることはない。更に三合会に潜り込んでいたスパイを使うのであれば、自分の手を汚す必要すらなくなる。しかし、関羽の仮面を被った男による更なる追撃があったということはココ・ヘクマティアル襲撃の失敗は彼らにとって誤算だったということだ。

では、彼らの本来の計画とはなんだったのか——。

そもそも、なぜ彼らは仮面をつけなければならなかったのか？

俺は京劇の仮面をつけた男たちに襲われたときに感じた違和感の正体を考える。そもそも仮面とは、自分以外の何かを演じるために作られたものである。

仮面が持つ特性は二つ。役になりきるための仮面と自分の正体を隠すための仮面だ。今回の場合は後者の意味を持つ。

確かに三合会にスパイと知られたくないのであれば仮面を被るのは当然だろう。

俺がココ・ヘクマティアルの輸送船の部品を集める最中に情報屋から話を聞いたところ、ラグーン商会の事務所に押し入ってきたほかの連中は見たこともない中国人に雇われたと言っていたらしい。

ということは最近、ロアナプラに来た中国人ということになる。

最近、ロアナプラに現われた中国人で仮面を被る必要がある人間は一人――。

「ロック、わざわざイエローフラッグにまで電話をかけてきて何のようだ！」

ダッチが電話口で鼓膜が破れんばかりの大声で怒鳴る。

俺は耳鳴りがする耳を塞ぎながら「ダッチ、仕事だ」と嘯いた。

「悪いが今晩は店じまいだ」

ダッチが心底めんどくさそうな声を出す。

今回の仕事は楽なほうだった、これで終わりにしてさっさと酒を楽しみたいんだろう。その気持ちは分からなくもなかったが、それでは俺が困る。

「頼む、ダッチ。一生の願いだ」

「おいおいロック。オマエの一生は何回あるんだ？」

なかなかの皮肉だ。俺は思わず笑ってしまった。

「これ以上、あいつらにかまうな。充分な金ももらった、これで壊された事務所を修理してもおつりは来るし、しばらく遊んでくらせるだろうが」

「それはそうだが……」俺はダッチになんと言おうか悩む。確かに俺がやろうとしていることはおせっかい以外の何物でもないのかもしれない。

しかし、このままヨナに危険が及ぶかも知れないのを黙って見過ごすわけには行かなかった。

「あの子供のことならお前が心配することはない。そもそも、あの子の周りに鎌を銃に持ち変えた死神がたくさんいるじゃねえか？」

ダッチがどんな顔をしているのか、俺にはなんとなく想像がついた。

きつとうまく言ったとニヤけた面をしてやがるはずだ。

「それでも、今回はヤバイのが紛れ込んでいるんだよ！」

「……ヤバイの？」 ダッチは俺の言葉に興味をもったのか、口調が代わる。

「スパイがいる、それがココ・ヘクマティアルに害を及ぼすかもしれない」

「だからなんだ……と言ってもロック。お前は聞かないからな……」

ダッチが根負けをしたのか諦めたような声を出す。

「もし、それでココ・ヘクマティアルを守れたらその分金はでるよ

な？」

「ロック。悪巧みしても結果が伴うとは限らないんだぜ？」

「そのときは俺が金を出す」俺は力を込めて言った。

「相変わらずお前は……」

ダッチが呆れたようにつぶやく。

「悪いがうちは従業員割引をしないからな？」

「ああ、出世払いで頼むよ」

ダッチは欧米人独特の大げさな笑いをしてから「レヴィ、ベニー―大急ぎで仕事だ！」と叫んだ。



## 第十話 暗夜之礫 前編

光の束が闇夜の海を切り裂く。

一撃必殺のその光の線が一本、僕の顔を横切った。

時おり揺れる船の甲板の上で僕はバランスを取りながら銃口を僕らの乗る貨物船に向けている海賊に照準を合わせ、撃つ。

僕らの船がロアナプラの港から離れるとすぐにどこからともなく、沸いて出る虫のように小型の船舶——海賊船が僕たちの船の後を追いかけてきたのだった。

僕たちは修理を終えたばかりの船を守るため、またココの「海賊には容赦しない」という方針にのっとり、いつも以上に海賊達へ過激に応戦をする。

僕らを襲う海賊たちにはきつとこの船がお宝の山に見えていると、思う。

なぜならこの船には沢山の武器が詰まっているし、武器の取引で得たお金だつて現金でたくさん保管している。それに、HCL I社の船員やココを誘拐すれば、かなりの額の身代金を得られると、海賊達は考えていると思う。

しかし、残念ながら海賊たちの願いは叶いそうに無い。彼らのいくつもの『夢の跡』が暗い海の波にその船体を揺らしている。

「これで半分ぐらいには減ったかな？」

ワイリが船に備え付けられている重量感のあるガトリング銃を海へと向けたまま、独り言みたいに言った。

実際、ロアナプラから僕らを追いかけていた海賊船たちの数は機関銃の銃弾で穴だらけになったり、エンジンが誘爆して爆発して炎をあげたり、襲うことを諦めて逃げ帰ったりで、その数は半分以下になっていた。

「取引の予定時刻までに、あいっちら全員蹴散らしちゃって！」

暗視ゴーグルをつけたココがうれしそうに飛び跳ねながらはしゃいでいる。

「ロアナプラでの借りは利子をたっぷりつけて返してあげるわ……」

真つ暗でココの白いスーツ以外はよく見えなかったけれども、ココが楽しそうに笑っているのがなんとなく僕には分かった。

「しかし、なんで急に取引を今日に？」ルツが細かく銃弾を海賊船に向けて撒き散らす。「そりゃあ、取引相手が賢いからさ」レームが銃のマガジンを入れ替えるのと同時に器用に指を動かして、新しいタバコに火をつけた。

「人民解放軍にバレてる？」

トージョがマガジンを入れ替えるレームを援護しながら聞いた。

「と、思っているだろう。俺ならそうするし」

レームは何かを考える『フリ』をしながらゆつくりとタバコを味わっている。たまたまレームの風下にいたバルメにたっぷりとレームの吐いた白いタバコの煙がかかると、バルメが「レーム、サボらないでください！」と怒鳴った。

不意に船が大きく揺れる。

僕の身体が一瞬、宙に浮く。思わず濡れた甲板に足を滑らせた僕の身体が海へと飛び落ちそうになったのをウゴの太くて大きな手が僕の腕を掴んで引っ張りあげた。

「ウゴ、ありがとう」

「大丈夫か、ヨナ？」ウゴが手すりを握る手に力を込めて、僕の身体を抱きあげても説いた場所に戻してくれた。

空を斬るような音がして、船の装甲に何か突き刺さる。

真ん丸い月に一本、黒い線が浮かぶ。

「乗り込んでくるぞー！」

ウゴが銃を頬に当てて死角となっている船の下に銃弾を放つ。

金属と金属が打ちつけられる音がして、火花が舞った。僕たちの船の下に海賊船のひとつが潜り込んだのだ。

月に浮かぶ黒い線に人影が浮かんだ。

「くっそー！」

鈍い激んだ光がウゴの肩に突き刺さり、そしてその光が蛇のようにならぬって闇の中に消えた。

ウゴの肩から白いシャツが少しずつ赤黒く色を変えていく。

「みんな気をつけろー！」

ウゴが刺された肩を押さえて苦しそうに叫んだ。

「世界の平和を守るため、混沌と武器を撒き散らす——」

声のするほうに顔を向けると、真ん丸い月の真ん中に黒い人影が浮かんでいた。

いつの間にか黒いコートを着た男が船のマストの上で二丁の銃を手にもってポーズ

を決めて見得を切る。

「不届きな銀狐に正義の鉄槌を！」

男が叫び、銃声とともにルツの足元に火花が散る。

「跳弾がケツに！」

「誰か、あの馬鹿を撃ち落とせ……」ココが呆れたようにがっくりと肩を落とした。

光の線がマストの男に襲い掛かる。男はその弾丸をよけようと身体を捻らせて、バランスを崩し数メートル下の海へ大きな波しぶきをあげて落つこちていった。

「アイツは何がしたかったんでしよう？」

マオが疲れたと言わんばかりに大きなため息をついた。

「みんな油断するな！」

レームが怒鳴るのと同時に、車のエンジンのような機械を動かす振動音が響く。

「おいおい、今度は秋葉原かよ……」

トージョの目の前にゴシッククロリータという、黒い西洋風の洋服に白いレースをところどころにあしらった目つききの悪い女がチエーンソーを構えている。

トージョが銃弾を放つが目つききの悪い女は器用にチエーンソーの幅が広いほうを盾のように使つてそれを防ぐ。

不気味なエンジン音と戦場にふさわしくないその格好が、よりその女の不気味さを増

幅させているように僕には見えた。

女は小柄でありながら、チェーンソーの重さをうまく利用して、銃弾を防ぎながらトージョとの間合いをどんどんと狭めていく。

触れただけでその身を確実に削ぐであろう、チェーンソーの刃は見るものに威圧感を与える。しかも急に波の勢いが強くなったのか船の揺れが強くなって銃の照準がつけ辛くなっている。

これではいくら銃を持っていたとしても、そう簡単に相手へ当てることは出来ない。トージョはそれでも的確にチェーンソー女に銃弾を当てるが、すべてチェーンソーを盾にされ防がれてしまっている。

マオがトージョの援護に回ろうと突撃銃を構えると——また激しく船体が揺れた。

「ココを中へー」

トージョが叫ぶ。

もう一隻、新たに船がぶつかって来たのだ。

また、敵が増える。

船に漂っている空気がさらに緊張感を増す。

マオの身体が思わぬ振動でバランスを崩す。マオがチェーンソー女に向けていた銃口がそれる、その隙を感じ取ったチェーンソー女が大きくマオの間合いに入り込む——

。僕は体制を低くしたまま、チエーンソー女の身体に体重を乗せたタツクルでチエーンソー女の身体を跳ね飛ばす。

「うわ」

チエーンソー女が短くつぶれたような声をあげた。

「あ」チエーンソー女は一言そう言ってバランスを崩し、持っていたチエーンソーに引張られるように海へと真つ逆さまに落ちていった。

「助かったよ、ヨナくん」

マオが大きな手で僕の頭を撫でた。

「ココが危ない」

僕はちよつと気恥ずかしくって、乱暴にマオの手をどかした。

「ああ、ココが危ないな」

トージヨがずれた眼鏡をかけなおして、再び銃を構えた。

◇

「ダツチ急いでくれ！」

「これ以上スピードはあがらねえよ。そんなに急ぐんなら魚雷にくくりつけてやる」

俺は嫌な予感が胸の中を渦巻いていた。

ラグーン号は海賊船の残骸と、その残骸から部品をあさるハイエナたちの小船の間をその速度を落とさずに進む。

夜になって波が強くなったのか、船の中はひどく揺れていた。

それはまるでひどく不安定な俺の心のようにだと思った。

「なあ、ロック。お前はむしろ武器商人の女が死んだほうが喜ぶんだと思ってたよ」

レヴィはタバコの煙をたゆたえながら俺が渡したジッポライターを弄んでいる。

「どうしてそう思うのさ？」

俺はあせる気持ちを抑えるように声のトーンを低くして言った。

「この世から武器商人が消えれば世界は平和に近づくからさ、たぶんな」

レヴィが船の天井を仰ぎながら、皮肉っぽく笑う。

「この世から武器がなくなっても平和にはならないよ、レヴィ」

「それはまたどうしてさ？」

レヴィが不思議そうな顔をして俺の顔を見た。

「例えば、ロアナプラにいる全員が武器を使えなくなったらロアナプラは平和になると思うかい？」



「そんな方法があるのかい？」

「例えば、の話さ」茶化すように言うレヴィに俺はぶつきらばうに返事をした。

「怒るなよ」レヴィが口を尖らせる。

「武器がなくなっても、三合会やホテルモスクワは殺し合いを止めないだろうさ。むしろ、素手やナイフでの戦いになる分その戦闘は今よりもっと悲惨なものになるかもしれない……」

「あー、そりや言えてるかもな……」

眉間にしわを寄せながら目を瞑るレヴィにはどんな凄惨な光景が見えているのだろう。

俺はレヴィの顔を横目にそう思った。

「それがどうして、あの銀髪女を助ける理由に繋がるんだ？」

レヴィはまっすぐに俺の目を見つめながら「子供が原因か？」とつぶやく。俺はレヴィの視線から逃げるように顔を背けると「いつもの悪い性癖さ」と嘯いた。

「おいおい、ずいぶんと派手にやってるよ」

ベニーが船の外を見てきたのか、潮風の匂いを漂わせながら重苦しい船のドアを開けて入ってきた。

「どうしたベニー？」

「通信機片手にお外を見てたら火柱が次から次に上がってやがる。海賊やろうとしてた奴らは逃げ出したみたいだけど、そうじゃないのが数隻……」

「仮面の奴らだと思ukai?」

俺の問いにベニーは頷く。

「僕にはなんて言っているか分からなかったが、中国語が飛び交ってたからたぶんあいつらだろうね」

「そいつはまずいな……」

俺は顎に手を当てて考えを巡らせる。

「毎度、毎度ロックには振り回されっぱなしだよ、まったく」

ベニーが大げさに手を広げて困ったというポーズをした。レヴィが「違いねえ」とジツポライターをベニーに投げつける。ベニーは「助かるよ」と言つてレヴィに渡されたライターで懐から出したタバコに火をつけた。

「まあ、今のうちに敵さんが減つてることを願いな、ロック。いくらアタシでもそう何人も相手にはしてやれねえ」

レヴィが吸い終わつたタバコを灰皿に乱暴に押し付けた。

「そのときは諦める」俺はベニーに手を出してジツポライターを催促する。

元々は俺のライターだ、という意味表示である。

「嘘付け」

「本当さ」

俺はベニーから返してもらったライターでいつの間にか啞えつぱなしになっていたタバコに火をつけてから、自分のポケットに入れた。

「ココ・ヘクマティアには優秀な私兵が付いている。それでも俺が首を突つ込みたがるのは性分さ」

単なる趣味の延長なのかもしれない、人助けという名の趣味の。

「まあ、いいさ。お前の取り分がアタシたちのものになるつてんならかまわないよ」  
頬杖をついてレヴィはつまらなそうに言った。



私たちがココ・ヘクマティアとの取引に指定した海域についたときには夜空には満点の星空が浮かんでいて、ロアナプラでの出来事がすべて嘘みたいに見える。

私と曹は自分たちが調達した小型貨物船の上でただ黙って二人で夜空を見上げていた。

「ジエイジエイは取引うまくいくと思えますか？」

曹が夜のおかずを聞く子供のように鼻息も荒く私に尋ねた。それはいつも感情を表に出さない曹にしては珍しいことで、私は少し驚いてしまった。

「うまくいってくれなければ困る……」

私は頭の中で星と星をつなげて、自分勝手な星座を作っていた。

これは私が子供のころから眠れないときにやっていた遊びだった。

父親に弄ばれ、自分の女の部分が痛くて眠れない時にはよく夜空を見上げていたのを思い出す。

なぜ、今それを思い出す——。

私は夜の海よりも暗い記憶の闇に引きずりこまれないように、頭を振った。

ああ、こんなに大きな満月だから昔を思い出すのか。

私はいつもより大きく見える真ん丸い月を見上げながら、そういえばマーマを殺した日は月が出ていたかな、と考えた。

もしかしたら、あの日は満月だったのだろうか。

だから、幼いころの事を今思い出すのかもしれない。

「曹、お前月を見て何を思い浮かべる?」

私は自分の気を紛らわせるために曹に話しかけてみた。

曹は私にならって空を見上げ「満月が二つあれば巨乳の女なのに……」と馬鹿なこと

をいったので、私は一発頭を小突いてやった。

「ジェイジェイが何に見えるって聞くから、言っただけだろう？」

曹が不服そうに唇を尖らせながら言った。

「お前の脳みそは下半身についているんじゃないの？」

私は精一杯の皮肉を込めたつもりだったが、曹には通用しなかったらしく「男はいつも下半身で決めるのさ」と嘯いた。

「ジェイジェイ。武器があつたら革命はうまく行くのかな？」

私は曹の問いに一呼吸、間を置いて答えた。

私はその間のあいだに曹の言った事をもう一度自分にも言い聞かせてみる。

「うまくいくさ。うちには王がいるんだ」

「ジェイジェイは王にべたぼれだから当てにならねえ」

私はまた曹の頭を小突いた。今度よりも強く小突いたため曹が「ぎゃあ」とワザとらしく悲鳴を上げた。

「ジェイジェイ覚えてる？ 人民解放軍から逃げ出した俺を助けてくれたときもこんな満月がキレイな夜だったこと」

「そうだったかな……」私は曹とであつたときのことを思い出しながらいった。そういえば私たち開放革命軍に投降してきたときもこんな夜だったような気がした。

「俺はさ、弱いものイジメみたいなことばかりする人民解放軍が大嫌いだったんだ」  
曹が昔を懐かしむように目を細めて月を眺めていた。

「だけど、開放革命軍に入つてよかつたと思うよ。ジエイジエイとも会えたり、部隊の皆はやさしいし」

私はただ「そうか」と頷いた。曹に対してなんと云えばいいのか分からなかつたからだ。

「もし、武器の取引がうまく行かなかつたらジエイジエイどうする？」

曹は今まで私に見せたことの無い怯えた子供のような目で私を見つめる。

私はその怯える曹のまなざしをまっすぐ見返して「何度も言うな」と強く言った。

「ジエイジエイ俺と一緒に逃げないか？」

私は曹の言葉に驚いて、次の言葉が出なかつた。

曹は不安げな表情を隠すようにうつむいている。

「お前——」

私の言葉を遮るように曹が「冗談、冗談さ」といつものような無愛想な笑顔を見せて笑った。

「大丈夫さ、絶対にうまく行く」

私は曹の身体に覆いかぶさるようにして、力強く抱いた。曹の身体は夜風に当たっているせいか、ひどく冷えきっていた。

「大丈夫。今までだってこうしてきたんだ」

私はその言葉は曹にはなく、自分に言い聞かせているのだと気づいた。

ああ、私も本当は不安なのか……。

私は曹をぎゅっと強く抱きしめる。

曹は何も言わずただ黙って私に抱かれてくれた。

## 第十一話 暗夜之礫 後編

鈍い銀色の光が蛇のようにうねりバルメに襲い掛かる。ピンヒールを履いた長髪の中華系の女は荒波で揺れる船の上であるにも関わらず、バランスを崩すことなくバルメの首筋、太もも、手首を狙う。

ナイフよりも一回り大きいカタナをまともに食らえば、骨を断ち切られきられる。

ピンヒール女は二本の刀に特殊な紐をくくりつけ離れれば、投げないナイフのように投てきし。近づけばそのカタナを手元にもどし敵の急所を狙う。

さすがのバルメも変幻自在なピンヒール女の間合いと、その足場の悪さで攻め倦んでいた。

だけど、バルメは楽しみに歪んだ笑みを顔に貼り付けていた。

ピンヒール女もバルメと同じように口元に薄い笑みを浮かべている。

「あなた中々やりマスネー！」

ピンヒール女が懐から小刀を投げた。

牽制のための投擲だけど、当たればバルメの動きが鈍くなるのは确实だ。



「そちらもー！」

バルメは上半身を折り曲げて、その小刀を避ける。

バルメはそのまま腕をつけて身体を前転させながら、ピンヒール女の足に地面スレスレに薙ぐような蹴りを放つ。

ピンヒール女はその蹴りを後ろに宙返りしてかわし、その遠心力を利用してカタナをバルメの顔にめがけて投げた。

バルメの頬に赤い線が浮かぶ。

「次は首をモラウヨ」

空を切る音と共にバルメの頬をかすめた。カタナが意思を持つているかのような動きで、バルメの首筋をめがけ再び飛んでくる。「チッ！」バルメは舌打ちをして、飛んでくるカタナを自分のナイフで弾き返そうと構えた。

「そいつを待ツテタネー！」

ナイフを構えたバルメの手に刀についている紐が蛇のように絡みつく。ピンヒール女はその紐を自分の方へと引き、バルメの身体を引き寄せる。そして、自分も甲板を蹴り一気にバルメとの間合いをつめた。バルメの首筋に刀が吸い込まれる——その一瞬。

ピンヒール女の身体が地面へと投げ落とされる。

バルメがピンヒール女の身体の勢いをその筋力で強引に捻じ曲げ柔道の投げ技の要

領でその身体を地面に強く叩きつけたのだ。

ピンヒール女は声を押し殺して、地面に叩きつけられた衝撃に耐えながらすばやく身体を起こし、バルメへと身構える。

「普通の相手ならナイフは投げるな。と、私は言いますがあなたは別ですね……」

バルメは頬から垂れる血を舌で舐めとりながら、片方の腕に絡み付いているカタナを海へと投げ捨てた。

一瞬の静寂の後、黒い水しぶきが舞う。

「これでお互い獲物は一つ」

僕たちは自分たちの貨物船に乗り込んでこようとす敵を銃弾で牽制しながら、二人の女の戦いをただ黙って見守っている。

もしも、バルメを援護することができたなら、二人の戦いはすでに終わっていたかも知れないけれど。めまぐるしくその位置を入れ替えながら戦うバルメへ援護のための銃弾が、当たる可能性が高いと判断した僕たちはこの戦いをバルメに任せることにした。

それはバルメが勝つ、という確信が僕らにあつたからでもある。

「筋肉女ガ……」

ピンヒール女の顔から薄い笑みが消えた。冷たい研ぎ澄まされた刃のような視線が

バルメに突き刺さる。

ピンヒール女は一本残されたカタナを身体の前へと突き出す。

バルメもそれに応えるようにナイフを構えた。

ピンヒール女とバルメの視線が交差する――。

先に動いたのはピンヒール女の方だった。

ピンヒール女は身体を低くしたまま一気にバルメとの間合いをつめると、下から上にカタナを斬りあげる。バルメはナイフでその刀を受け止めて、そのピンヒール女の動きを抑えこむように上から体重をかけてその動きを止める。

二人は刃を交差させたまま睨みあう。

ナイフとナイフを使った戦いはお互いの腕がいいほど、一手一手がチェスのように相手との「読みあい」に変わる。

相手が一步踏み込めば、こちらは下がり相手の手を誘う。

相手がその隙をついてくるのなら、こちらはフエイントを入れる。或いはそれすら相手の誘いで、こちらの考えを上回るようなら、こちらの身を切らせ、敵の骨を絶つ。

もしも、自分と同じかそれ以上の腕を持つ相手なら、相手の想像を上回るような手を打つか、完全に相手の手を読む以外に勝つ方法はない。

しかも、勝ったところで自分が無傷とは限らない。それがナイフ使い同士の戦いというものだと、僕はバルメに教わった。

二人の身体が一瞬離れる。

距離を取ろうとするバルメに対し、ピンヒール女はその隙を狙って猫のように身体を跳躍させ間合いをつめた。

隙をつかれたバルメはピンヒール女の間合いから逃れるために後ろへと下がるが、その背中を船の手すりへとぶつける。

バルメの逃げ場が無くなった。

ピンヒール女はその手に持っていた刀をバルメの身体をめがけ投げる。逃げ場をなくしたバルメにはその刀をかわすことが出来ず叩き落すように腕を前に出すが、その腕にカタナが突き刺さる。

ピンヒール女は蛇を思わせる舌で唇を舐めた。

ピンヒール女は懐から小刀を取り出しバルメの首筋へとその刃を付きたてようとする。その刹那——バルメがピンヒール女の腕を掴み、腹の部分に足を当て巴投げの要領でピンヒール女の身体を放り投げた。

「なっ——！」

ピンヒール女の身体が宙へと飛ぶ、バルメの身体もそのバランスを崩し手すりから身体を滑らせその姿を消す。

「ドボン」という大きな音がして派手に黒い水しぶきが舞った。

僕は先ほどまでバルメがいたところへ走った。

さすがのバルメと言えどもこの暗い海の中へ放り出されたら無事でいられる保証はない。それに僕たちの船の速度から考えると、今のうちに助け出さなければバルメを一人置いていくことになる。

僕はバルメのことが心配になって、手すりから身を乗り出す。

「やあ、ヨナ。助けに来てくれたんですか？」

バルメの声がした。僕は声のほうへ視線を向けると苦しそうな顔をして片手でバルメが手すりにつかまっていた。

僕はバルメの手を掴んで力いっぱい引き上げる。バルメの身体は思った以上に重くなかなか持ち上がらなかった。

「筋肉女！」

どこからかアクセントのちぐはぐなピンヒール女の声がした。

「次にアツタラ、そのケツ四つに切刻ンデヤルデスよ！」

ピンヒール女の声がどんと遠のいていく。

バルメは僕の手を掴んでやつとのことで甲板まで登り「今回は引き分けですね……」と残念そうにつぶやいた。

「腕は大丈夫？」

僕はバルメの腕に深々と突き刺さったカタナを指差した。

「ココを守るほうが優先です」

バルメは大きく息を吐いて、痛みに耐えながら腕に突き刺さったカタナを勢いよく引き抜いた。僕は自分の服を裂いて即席の包帯を作つてバルメの腕を強くしばり血を止める。

即席の包帯はすぐに色を変えた。バルメは痛そうに目を細めながら「ヨナ、ありがとう」と無理矢理僕に笑つた。

空の色が変わつてきた。

黒いペンキをぶちまけたようだった空の色がほんのりと青ずんできていた。心なしか頬に当たる風もひんやりとした冷たさが抜けたような気がした。

僕は無茶をいうバルメを強引にココと一緒に医務室に運んだ。

バルメがピンヒール女に負わされた怪我は、きちんとした包帯を巻いてもすぐに赤くなるほど深いもので、手術が必要だとココが言っていた。

「私はまだ戦えます！」と子供みたいに駄々をこねるバルメをココがこめかみ辺りをびくびくさせると急にしゅんと大人しくなったのを見てから、僕は再び甲板に戻った。

「ヨナ、バルメの様子はどうか？」

レームが休憩と言わんばかりにデッキの影に隠れながら新しいタバコの箱を開けているところだった。

「元氣だったけど、手術しないといけないって」

僕がそう応えるとレームはアサルトライフルを敵に向けて撃ちながら「中々の手誰だな、あの中国女」と関心したようにタバコの煙を吐きながら言った。

「みんなは大丈夫？」

「ああ、なかなか奴さんたちも必死だが、そろそろ方がつくだろう」

レームが僕の頭に手をポンと置いた。

「それにほら、増援が来たしな」

「増援？」

僕が首をかしげると、レームが指をさして覗いてみるという合図をした。顔を半分だけだして壁からそつと覗き込む。

そこにはロアナプラであった目つきの悪いレヴィと名乗った二丁拳銃ヘトウーハンドの女がいた。

ちようどレヴィが僕たちの船に体当たりをした仮面の男たちの船に曲芸師のように飛び移るところだった。

レヴィは僕たちを追う二隻の仮面の男たちの船に乗り移ると、コルトM79という銃でグレネード弾を船に撃ち込んだ。

小さな、というより小規模な爆発が起ると仮面の男たちの船は炎と煙を上げる。レヴィはその炎から逃げ出そうとしていた仮面の男に銃身の短い短機関銃を連射して銃弾を浴びせる。

男が踊るように小刻みに身体を揺らせてから、身体の動きを止めて後ろから海へと落ちていった。

レヴィがあらわれたことで、仮面の男たちの動きが変わった。

今、仮面の男たちからすれば敵に挟まれた形になっている。敵に奇襲をかけているときに他の敵から奇襲を受ければどうなるかは簡単だ。

防御力の弱い後方から銃弾を打ち込まれる恐怖は、歴戦の勇者だったとしてもその足をすくませるには充分だと思う。

僕たちはレヴィを援護するように仮面の男たちの動きを制限させるように銃弾を浴びせる。

どんな人間だろうと、身体のどこに銃弾を受ければ嫌でもその動きは鈍る。当たり所



が悪ければ死ぬし、当たり所がよくても戦場で戦鬪力を削がればそれだけで致命傷になりかねない。だから当たりそうも無い銃弾だとしてもその身を隠す以外に方法は無い。

しかし、それは後ろから襲い掛かる敵がない場合にのみ通用する。

レヴィのように銃弾を恐れず敵を「狩る」ことを楽しみにしているような奴には物陰で怯えるように隠れる彼らは恰好の獲物だ。

僕はやつとみんなの「ロアナプラは最悪だ」という言葉の意味を理解した。

ロアナプラにはレヴィやピンヒール女、目つきの悪いゴスロリ女みたいな「殺し」を楽しむ奴が多すぎる、と僕は思った。



夜明けが近い。

黒ずんだ空は色が変わり、地平線の向こうはすでに朝を迎えているのだろう。

ココ・ヘクマティアルの貨物船に招かれた俺は海の見える客室でタバコに火をつけながら丸い窓から外の様子を伺う。

窓の外では船から船へと飛び移りながら、楽しげに殺しを楽しむレヴィの姿を垣間見

ることが出来た。

「ミスター・ロック。わざわざ助けに来ていただき感謝します」

ココ・ヘクマティアルの声を聞いて俺は吸っていたタバコをすばやく灰皿へもみ消した。

俺たちの船、ラグーン号がココ・ヘクマティアルの貨物船に追いついたところにはココ・ヘクマティアルの船は二隻の仮面の男たちの船に襲われているところだった。

仮面の男たちの船の一隻は貨物船の下に潜り込み、ココ・ヘクマティアルの私兵の銃撃を防ぎながら、隙さえあれば船へ乗り込もうと虎視眈々と狙っている。もう一隻は銃撃をココ・ヘクマティアルの船へ浴びせながら私兵を牽制しているところだった。

それからもう一隻、貨物船にワイヤーをくりつけていた空の船がまねけに貨物船がたてる波にその身をゆらしながらくつついていた。

そういえばラグーン号がココ・ヘクマティアルの貨物船へ向かう途中に黒いコートとチェーンソーとシエンホアの姿を見たような覚えがあった。

「ミスター・ロック。眠気覚ましにコーヒーでもいかがですか？」

「頂きます」俺はコレだけの襲撃にあいながらも疲れた顔を見せず、笑顔を絶やさないう女の姿を見て、ただただ感心していた。

手誰の私兵を従えるには、それぐらいの胆力がなければ務まらないのだろう。

武器商人は大変だな、と俺は口の中でつぶやく。

「今回は出張手当の交渉でしょうか？」

ココ・ヘクマティアルは笑いながら、俺にコーヒーカップを手渡す。

「俺の給料がかかっていますからね……」

「おやおや」ココ・ヘクマティアルは銀色の髪をかきあげながら湯気の立つコーヒーカップに口をつける。

彼女のリップにはくつきりとした赤い唇の跡が付いていた。

「わざわざ化粧直しをさせたように申し訳ないです」

「さすが、鋭いですね……」

ココ・ヘクマティアルの笑いが一瞬凍る。

俺は思わず、コーヒーを吹きこぼしそうになった。

さすがに女性に言うには無神経な言葉だったな。

ロアナプラに毒されてきたなど自分に蹴りを入れたい気分だった。

「それよりもどうして二人きりで？」

俺は黒々としたコーヒーに視線を向けて、刺すようなココ・ヘクマティアルの視線から逃げる。

「それはですね」

ココ・ヘクマティアルがワザとらしく咳払いをした。

「実はアナタを引き抜きたいと思ひまして」

「冗談でしょう?」

俺はココ・ヘクマティアルと視線を合わせる。俺の目をまつすぐに見る彼女の視線は強い意志を感じさせる強い力を持っていた。

「ならば俺からも質問があります」

俺も彼女の目を見返す。

俺の視線に気づいて、ココ・ヘクマティアルは不思議そうな顔をした。

「給与の話ならかまいませんよ?」

本気とも冗談とも付かない口調でココ・ヘクマティアルは言う。

「武器がなくなっても世界は平和にはなりませんよ。少なくともロアナプラは」

俺の言葉に一瞬のココ・ヘクマティアルの笑みが消えた。しかし、すぐにいつもと変わらぬ笑顔を見せた。

俺はココ・ヘクマティアルの笑顔が消えた、その一瞬に深い闇の欠片を垣間見た気が

した。

「なんのことでしょうか？」

「アナタがヨナ君を連れてきている理由はそれが関係しているんじゃないですか？」

俺の質問にココ・ヘクマティアルはその笑みを深いものへと変えた。

歪んだというよりも口の端をあげた彼女の笑顔は暗い、と表現したほうがしっくりくるような、そんな笑い方だった。

「ミスター、いえロツク。世界は争いであふれています。きつと地獄も天国もそろそろ定員オーバーになるのは間違い無いでしょう」

「そうかも知れませんか」俺は愛想笑いをしながらコーヒーを口に含む。香ばしい豆の香りと少しの酸味、深い苦味が口内に広がった。

「私の予想ですが、水資源を争う第三次世界大戦は高い確率で起こるでしょう。いえ、すでに起こっている地域もあると考えるのが自然です」

俺はコーヒーカップを手を持ったまま彼女の言葉を受け止める。

確かに世界人口の増加や先進国を目指す国々がこのままその力をつければ、水だけではなく資源を求めた戦争は今まで以上に増えるだろう。

「そうなればアナタの仕事も忙しくなるでしょうね」

「ええ、人間は愚かですから」

俺の冗談を押さえ込むようにココ・ヘクマティアルは強く言う。

彼女の言葉に俺は深い憎しみが込められているような気がした。

「だからと言ってアナタがそれを止めることは出来ない、違いますか？」

「もし、それを止められるとしたらロック。アナタはどうしますか？」

彼女の言葉を俺は冗談だと思った。だが彼女の表情を見てその言葉が本気である事を知った。

なぜならココ・ヘクマティアルは笑っていないからだ。

「それが本当に可能だと……？」

「そのすべを私はもうすぐ手に入れる、としたらどうしますか？」

「どんな方法で？」俺には彼女が言う戦争を止める、と言うその方法が皆目検討がつかなかった。普通に考えればそれはすぐに無理な考えだと分かるはずだ。

「武器を売らなく——する？」

俺が搾り出すように出すことができる言葉はそれだけだった。少なくとも今の彼女ができることは武器を売らなくすることぐらいだ。

「惜しいー！」

無邪気な子供のように楽しげにココ・ヘクマティアルが振り向いた。

「もしも、その方法に興味があるのなら」

ココ・ヘクマティアルが言葉を止め、大きく息を吸い込む。  
「私の部下になれ」

強い意志を感じられる言葉で、俺には彼女が言っていることが真実のように思えた。  
本当にココ・ヘクマティアルは世界の戦争を止めるすべを持っているような、そんな気分させる言葉だった。

俺は懐のポケットからタバコの箱を取り出す。

「失礼」俺は一言そうつけて首のネクタイを緩めながら取り出したタバコの箱からタバコを取り出してポケットから出したライターで火をつけた。

俺はタバコの煙を肺に染み込ませるように、大きく紫煙を吸い込む。

「ミス・ヘクマティアル。武器がなくなった世界だろうと争いは止まりません。残念ながら」

ココ・ヘクマティアルはタバコを吸う俺を腕を組んで、ただ黙って見つめている。

「ミスター・ロツク。なぜそう思われるんですか？」

彼女の言葉は棘がある、きついものだった。

「銃がなければ、ナイフで。ナイフがなければ棒で。棒がなければ素手で。少なくともロアナプラなら今よりも愉快なことになるでしょう」

「そうでしょうか？」

俺を見つめるココ・ヘクマティアルの目には、強い軽蔑の色が浮かんでいるように俺には感じられた。それは自分の言葉を否定されたヒステリーではなく、確固たる意思を踏みにじられた怒りと、彼女の考えを否定した俺に対する不満だと、俺は思った。

「少なくともロアナプラでは何も変わらないでしょうね」  
「ロアナプラだけではないかも知れませんか？」

彼女の目に浮かんでいた軽蔑の色がすつと消え、いつも見せるにこやかな笑顔に戻った。

それは俺に「この話は終わりだ」と暗に告げていた。

「助けていたただいた分の謝礼は弾みます」

ココ・ヘクマティアルがそう言うと同時に、どこからか大きな爆発音がして、船が揺れた。

「終わったようですよ」

ココ・ヘクマティアルはその揺れを気にすることもなく、淡々と言った。

俺はもとの作られた笑顔にもどった彼女の横顔を見ながら「そうですね」と頷いた。





空が明るくなつていた。

もうすぐ夜の時間が終わり朝が来る。

白い煙を上げながら私たちが乗る船のほうへとH C L I社とマーキングされた貨物船と魚雷艇の二隻が向かつてきていた。

私はココ・ヘクマティアルが乗る船があげる白い煙を見ながら、彼女らは無事に仮面の男たちを退けたのだと、確信をもった。

「どうやら無事取引は終わりそうだぞ？」

私は曹に気づかれないように安堵のため息を吐いた。

「いや、ジエイジエイ。取引は失敗するんだ……」

曹の言葉は感情を押し殺したような声に驚く。

それは私はまだ「裏切りの虎」と言われていたころの声に似ていた。

乾いた銃声が響く。

私は背中から腹を何かが抜きぬける衝撃で前に倒れた。

思わず腕を前に出そうとしたが、力が入らない。

燃え爛れるような熱を身体の奥から感じる。

突然、訳も分からず吐き気がこみ上げてきた。抑えが効かず口から溢れ出たそれは真つ赤な血だった。

「曹、お前……」

口の中が鉄の塊を食べたようにひどく、錆びくさい。

次から次へと口から溢れ出る血と、身体の中が焼けるように熱いのに震えが止まらない。

私は霞んでいく目の前の光景が急に怖くなった。

私が見上げる空はさつきまでみた夜明け前の空ではなくなっていた。

どんどんと目の前が真っ暗になっていく。

まぶたが急に開けられなくなった。

急激な眠気が私を襲う。

ああ、私は死ぬんだ——。

「さよならジエイジエイ」

私の耳に曹のやさしい声が響いたような気がした。

## 最終話 国破山河在

結局、指定の海域に彼女たちの姿はなかった。

ただ、俺たちはその海域で死体となつてただよっている開放革命軍のフーの姿を見つけた。

俺は海の波に漂っている彼女の死体を見て吐き気を催してしまった自分を恥た。

彼女は殺されてから時間がたっていなかったため、顔はきれいに整っていたがサメに食われてしまったのか、身体のいたるところに欠損があった。

「あーあ、サメの餌になつちまつたか……」

レヴィイがラグーン号の上から彼女を見下ろしながらタバコをふかして言った。

「私たちがもう少し早ければ……」

ココ・ヘクマティアルが大きなため息を吐いた。

「ミスター・ロック。あなたは分かっていたんでしょ？」

疲れたような笑みを俺に向ける。

「まあ、ね」

俺はどんどんと高くなる太陽をながめながら、重い罪の意識を感じた。

俺が彼女を殺したのだ——。

「ミス・ココ・ヘクマティアル。あなた方を襲った仮面の男たちの中に関羽の奴はいなかったのですよね？」

「ええ、それが？」

ココ・ヘクマティアルが不思議そうな顔をする。

「フリーさんは今回の取引に仲間を連れていたようですが、彼こそがスパイだったのです」  
ココ・ヘクマティアルは一瞬、目を大きく見開いて驚いたような顔をしたが、すぐにいつもの笑顔を見せた。

彼女はこう思っているのだろう。

俺は不意にココ・ヘクマティアルが今回の件についてどう思っているのか、聞いてみたかった。顧客が死んだだけなのか。

武器が彼女を殺したのか。

俺の心の中に渦巻くなんとも言い表すことが出来ない、どす黒い気持ちのようなものをココ・ヘクマティアルも感じているのか、それが俺は気になった。

「スパイの目的はあなたの暗殺と、取引の妨害。これは俺の推測ですが奴は人民解放軍が送り込まれ、ずっと前からフリーさんの組織に忍んでいたのでしょうか」

「確かにただのレジスタンスが大量の武器を持つのは、いくら人民開放軍だと言えども

見逃せなかったのでしょうか……」

「それだけでは無いでしょう。規模から見ると開放革命軍からすれば一世一代の賭けだったのでしょうから、それが失敗したとしたら——」

「やる気をなくすだろうな、そりゃあ」

ダッチが両手にコーヒーを持って甲板に現われた。

「ミス・ココ・ヘクマティアル。料金は確かに頂いた。勝手に押しつけてきた我々に対しての報酬としては充分すぎやしませんか？」

ダッチが口元をあげてニヤリと笑う。

俺は心の中で、どうせ何を言われても金を返さなくせに、と毒づいた。

「いえ、当然の報酬だと思つて受け取つてください。船のパーツも持つてきてくださつてとても準備もよろしいようで……」

ココ・ヘクマティアルはダッチからコーヒーを受け取りながら含みのある笑い方をした。

彼女らしい皮肉か——俺はふつと息を吐いた。

「彼女を吊つてあげたいのですが」

ココ・ヘクマティアルが目を細めて俺を見た。

「偽善者だと思えますか？」

俺はココ・ヘクマティアルの目をまつすぐに見る。

「いえ、個人の心情に口は出さない主義です」

彼女も俺の目をまつすぐ見返して、笑った。

その笑みはとても柔らか味のある女性らしい笑い方だった。少なくとも武器商人がするにはやさしすぎるように俺には感じた。

「花……でもあればよかったのでしょぅね」

レヴィが小さく舌打ちして「死んじまったら何にもわからねえよ」とぶつきらぼうに笑った。

「おい、ロックー！」

ダッチがどこからか酒瓶を俺に投げつけなる。俺は投げられた酒瓶を思わず落とす。そうになりながらも、その酒瓶が海に落ちる前に捕まえた。

「酒の分、お前の給料から減らすからな」

大きな笑い声を上げながら、ダッチは船の中へと消えた。

俺は腕の中にある酒瓶に目を落とす。

もう、半分も無いじゃないか。

俺は口の中でそうつぶやいて、一人で笑った。

「いらぬなら、アタシが飲むぞ」後ろからレヴィがからかうように言う。

「私からも、彼女の弔いに……」

ココ・ヘクマティアルが両手を組んだ。俺はその姿を確認してからフーが漂う海へと酒を注ぐ。

酒瓶から注がれる琥珀色の酒が大きな海へと溶けていく。

濃い琥珀色の酒は海の波にかき消されるように、すぐさま消えて無くなった。

俺はフーを殺したスパイの事を考える。

彼は仲間を殺して、何を思うのか――。



俺は血で汚れた服を着替える気分にはなれないでいた。

今まで何人も殺してきたんだ。そう俺は自分に言い聞かせる。

しかし、自分の気持ちは落ち着かない。

俺は自分の心が揺れるのを不思議に思っていた。

ジエイジエイを殺した。

ジエイジエイを撃つたときの引き金の感触が頭から離れない、

身体はひどく震える、涙がとめどなくあふれてくるのが不思議だ。

強い酒が欲しい、のどが焼けるほどの――。

ふとジェイジェイが酒場で言っていた言葉を思い出す。

何か困ったことがあると、むりやり俺を酒場に誘い酒場の店主にそう言つて困らせていた。

「俺は何を考えている!」

俺の声は波の音にすぐにかき消される。

さびしい――。

俺は自分の心にふと浮んだ感情に驚いた。

そして、理解する。

俺は船の中にジェイジェイが残した酒がある事を思い出して、立ち上がる。

その足取りが自分でも驚くほどふらふらとしているのを感じて、大きく舌打ちを打つた。

そうだ、俺は本当はジェイジェイを殺したくなかった。

だから、俺はジェイジェイを殺す前に……。

後悔はずつといつも後にやってくる――。

俺は戸棚に隠すように置いてあったテキーラの瓶の蓋を開け、そのまま口をつける。



むせ返るような強烈なアルコールの匂いと喉が焼けるように熱くなるのを感じ、むせそうになるのを我慢して胃袋へと流し込む。

そういえば昨日から何も食べていないな。

俺は空っぽの胃袋が熱を持つのを感じてふと思いついた。

どうでもいいことだ、と自分を鼻で笑う。

活力、というべきか。動く力、というべきか。

とにかくひどく身体が重く、力がぬけていくというか、入らない。

「俺は――」

俺はそこから先の言葉を言えない。

言ってしまうば、自分の存在を否定してしまいそうで恐ろしい。

「ジェイジェイ、あんたは俺の本当の姉のようだったよ……」

俺は自分の心を押し殺し、とめどなくあふれてくる涙とジェイジェイの血の匂いを感じながら、テキーラを流し込んでいく。



「今回は大赤字よ……」

ココががっくりと肩を落として海を見ながらうなだれている。

ラグーン商会が持つてきてくれた部品で応急修理を終えた貨物船は正式な修理をするために、一度H C L I社本部に戻ることになるらしい。

だけでも、僕らはこの後にも取引があるため途中で船を変え、積荷を積み替えて仕事が続くらしかった。

それを聞いたココは「休みなしてどういふことよ！」と叫んでいた。

ココは指折り数えながら「船の修理費でしょ、ラグーン商会への報酬でしょ、結局武器は売れなかつたし——」と引きつった笑い方をして黙る。

僕は急に黙ったココの顔を覗きこむ。

「あーデ○ニーランドに行きたい」

ココが呪文のように何度もその言葉を繰り返していた。ココの隣に腕に包帯を巻いたバルメが「落ち込むココもステキです!」と主人を励ます犬のようにうれしそうにココにまわり付いていた。

「しかし、今回の仕事はきつかったな……」

レームが疲れたようにゆっくりと肩をまわす。

「また、ルツのやろうケツに一発貰ったんだって?」

レームがワイリに言うどワイリはかけている眼鏡を上げて楽しんで口の端をあげて「今、弾丸摘出中だよ！」と笑った。

「まあ、ルツはいつものことだとしても。ウゴに、バルメがあそこまでやられるのは正直珍しいよな……」

トージョが大きくため息を吐く。

「さすが悪徳の街、ロアナプラですね」

マオもトージョにつられてため息を吐きながら苦笑いをした。

僕も眠い目をこすりながらこのロアナプラであつた人たちの事を思い出す。

二丁拳銃、紳士な黒人マツチョにサラリーマンとピンヒール女に、チェーンソー女。

サラダボールみたい特殊な人間の種類が多かつたな、僕はそう思った。

不意に僕はロツクが僕を見ると見せる悲しそうな顔を思い出した。同情、とは違うやさしさに満ちた、とか心配しているという視線は僕にはくすぐつたいものがあつたな、と

どうしてロツクは僕を見るとときにあんな顔をしていたんだろう？



ココ・ヘクマティアルが去ってからしばらくロアナプラは静かだった。

少なくともロアナプラ周辺の海域はしばらく、驚くほど安全だったことだろう。ココ・ヘクマティアルの容赦ない攻撃に半分以上の海賊たちが休業を強いられていたのだから。

結局、その後の開放革命軍のスパイのことは分からずじまいだった。

ただ、最近のネットニュースでは「中国崩壊間近か!」「ついに中国の分裂が始まった」などのうたい文句と、暴動のニュースが増えていた。

今回の件と関係は無いのかもしれないが、つつい中国関連のニュースが出ると気にするように、俺はなっていた。

結局、俺は大いなる徒労の末、ラグーン商会は大金をココ・ヘクマティアルからせしめレヴィとタッチ、ベニーの懐は潤った。

俺は、俺で給料をもらったが酒代が高かったらしく、給料は半分に減らされていた。

「お前、いつまで陰気な顔してんだよ」

事務所ですまらなそうにタバコを吸っている俺にレヴィがニヤリと不適な笑みを浮

かべて笑いかけきた。

「何もしないをしてるのさ……」

俺はタバコの煙を吐き出して短くなったタバコを灰皿へと押し付けて消す。

「はあ？」とレヴィは目を細めて俺を睨む。

「寝言は寝て言え。あの世で言いたいなら手伝つてやろうか？」

レヴィはにこやかに近づきながら腰のソードカトラスへと手を伸ばす。

いつもの日常が返ってきた。

俺は目の前のレヴィを見ながら、ため息を吐いた。

「わかった、今度はどんな仕事だよ……」

〈了〉